風鈴中学生徒会！

市川かうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風鈴中学生徒会！

【Ｎコード】
Ｎ６６６５Ｈ

【作者名】
市川かうた

【あらすじ】
生徒会長は現在友達１人の八城くづゆ、副会長は元：引きこもりの多野奏、他メンバーは現在探し中！な生徒会が卒業まで頑張っちゃうストーリー！（『引きこもり副会長』、『頑張れ生徒会長！』の２人が主人公です。連載ってか短編集ってか、その中間ってか。上記の話２つも入ってます。読まないと多分わかんないので）

引きこもり副会長！

いきなりカミングアウトするが、僕は引きこもりだ。かれこれ2年ほど引きこもっている。
現在は中三。つまり中一から引きこもっているわけだが、まったくもって快適な生活だ。
前までは担任に言われてしつこく僕を誘っていたクラスメイトも今ではぱったりと来なくなったし（大体お前らのせいで行かなくなったんだから誘われても行く訳がない）、親も共働き故に煩く言ってこない。
素晴らしい生活だ。勉強も、人付き合いも、今の僕には必要ない。
昼過ぎまで寝て、飯食って、ゲームやって漫画読んで寝ればいいだけの生活。
このまま行けばニートは確実だろうが知ったこっちゃない。僕の人生をどう過ごそうが僕の勝手なのだ。何より、僕はこの世界にはいらない人間だから別にいいのだ。
「…腹減った」
枕元の時計を見ると、針は丁度午後1時をさしていた。
そろそろ飯にしよう、とベッドから降りようとした瞬間、一番聞きたくないものが僕の耳に届く。

ピーンポーン…ピーンポーン…

インターホン。セールスだか宅配便だかは知らないが、僕は出るつもりはない。
なんでわざわざ人間なんぞと会話せにゃいけないのだ、とどこぞのＲＰＧの魔王のようなことを思いながら、僕は部屋の中に完備したキッチンセットへ向かう。

冷蔵庫、ガスコンロ、ポット、などなどがそろった部屋の一角はなるべく部屋から出たくない僕がそろえた必需品だ。
「今日はカップラーメンにすっかー…」
ぼりぼりと頭をかきながらカップラーメンを取り出す。蓋を開けてポットを押せば、中に熱湯が入っていく。3分で完成だ。素晴らしい。
カップラーメンは引きこもりの味方だよなぁ…としみじみ思っていた僕に、あの無機質な電子音が再度届く。

ピーンポーン…ピーンポーン…

何様だ。どこのどいつが僕の素晴らしい生活を邪魔している。
インターホンの音は、はっきり言って連続で聞いていて気持ちのいいものじゃない。
僕はいらいらを抑えながらカップラーメンを持って下の階まで降りていった。
その間もうるさい電子音は響きまくっている。
「うるせぇー…」
ため息を吐きながら画面を確認した僕は、一瞬全身の血が凍ったかと思った。手が震える。
画面に映っていたのは、ウチの生徒だった。クラスメイト？と思いつつよく見てみるが、その顔に見覚えは無い。
黒い長髪をなびかせて睨むようにカメラを見つめている彼女は、何故か仁王立ちだ。
ブレザーのポケットについているのが百合の花だから、僕と同じ三年なのは分かった。ちなみに1年はコスモス、2年は椿だ。
「…誰だこれ」
呟いた僕に反応するように、再度電子音が鳴る。
考えるより先に、僕は受話器を取っていた。
耳に当てた瞬間に我に返って焦る。どうしよう、何も考えてなか

った。
無言で焦り続ける僕はどうしようもないのでそのまま何も言えずにその場に棒のように突っ立っていた。
玄関前の彼女は僕が出たことに気づいたらしくカメラの前で数回咳払いをする。
…なんでそんなに気合が入った顔をするんだ。
困惑する僕の耳には、数秒の沈黙の後に、凛としたハスキーボイスが届いた。
『風鈴中学三年、生徒会長の八城（やしろ）くづゆだ。君は多野奏（たのかなで）くんだな？』
妙に威圧感のある喋り方だ。僕は口の中が渇くのを感じながら小さくそれを肯定した。
…学校の人間と話すのははっきりいって苦痛だ。あまりいい気分じゃない。
『「私の」学校で現在不登校となっている生徒は君一人なのは知ってるか？』
今こいつ『私の学校』って言いやがった。なんて人間だ。
それにしてもこいつも僕を学校に行かせたがるやつか？今になって…面倒くさい。
「いえ…知りません」
少し不機嫌さが声に出た。だが相手はさして気にしていないらしい、変わらない表情で話し続けた。
『そうか。ならそのことで話があるんだが…』
「言っておきますが僕は学校へ行くつもりはありません、その話はするだけ無駄です。それじゃ」
僕は受話器を切って、急いで2階へ上がった。部屋に入ってベッドの上に座る。
…なんで今更。ていうかなんで同学年相手に敬語を使ってるんだ僕。
あいつの雰囲気が原因なのだろうとは思うが、それにしても生徒会長直々に来るなんて。

「僕一人…か」
他の生徒はみんな普通に学校に通っているんだな…。僕だけが時間を止めたまま家の中ですごしてるってわけか。
はぁ、とため息を吐いた僕は、自分がそれを少し残念に思っていることに気づいて急いで頭を振った。
「んなことあってたまるか。僕はこの生活が好きなんだ」
そう呟いてから、手の中のカップラーメンに気付く。ぼーっとしていたせいで気付かなかったがもうとっくに三分経っていたらしい。僕はキッチンセットの中から箸を取り出そうと立ち上がった。

その時。

みし、…パリーンッ！！

「…え？」
僕の背後で凄まじい音が響いた。考えたくは無いが、僕の後ろにあるのはカーテンを閉め切ったままの窓だけだ。
…もしや。
ゆっくりと振り返った僕の目には、先ほどインターホンの画面で見たよりも濃くたなびく黒髪が映った。
「するだけ無駄とは何だ！話してみなければ分からないだろう！」
先ほどの会話を続けるかのように現れた生徒会長。僕はこの時点でようやく、彼女の異質さに気付いたのだった。

とりあえず、割れた窓を片付けて、そばの椅子に座る。
彼女は勝手に僕のベッドを上を陣取ると鞄の上に脱いだ靴を置いて僕を見つめた。
「…なんのようですか」

むっすりと言葉を紡いだ僕に、生徒会長は綺麗なハスキーボイスで答える。
…ところでこの人、一軒家の二階に窓から入るってどんだけなんだ。
「君に学校に来てもらいたい」
「…お断りします、って言いませんでしたか」
「なぜだ」
この人はどうやら話が通じない人らしい。
僕はため息を吐きながらラーメンをすすった。伸びたラーメンはあまりおいしくない。
「……僕が学校に行かない理由を貴方に教える義務はないはずです」
「そうだな。まぁ私は君の理由は知っているからいい」
「は！？」
不機嫌に言った僕の言葉をさらりと流した生徒会長に、僕は驚きと苛立ちを同時に感じた。
知ってる、ってことは誰かから聞いたりしたってことだ。
ってことは僕が昔何をされたか知っているはずなのに、こいつは平気な顔をして来たってことだろう？…異常だ。
「私は生徒会長だからな。生徒のことは知る義務がある」
「義務、って…あんたそれプライバシーの侵害だろ！」
怒鳴る僕を彼女はそんなことはどうでもいいとでもいいそうな顔で見つめる。その涼しげな顔が余計に僕をイラつかせた。
「いきなり来て何なんだよ！僕が学校を休むのは僕の自由だろ！？」
「…落ち着け、多野」
「ていうか僕が休んでる理由知ってるならわざわざこんなとこまで来ないでまずあいつらを何とかしてくれよっ」
「それは出来ない」
「何で！」
僕がこんな風になった原因を先に直すべきなんじゃないのか？僕は何もしてないのに、どうして僕の方に皆来るんだ？

イライラをそのままぶつけるように睨みつける僕に、生徒会長は静かに答えた。
「私が解決したところで同じことの繰り返しだからな」
「……」
僕は怒鳴るのを止めた。
「私は、『私の』学校で不登校がいるのがとても悲しい。それが一人だけならなおさらだ。だから今日、私は生徒会長になって初めての大きな仕事を、君に学校に来てもらうことに決めたのだ」
「…僕は行かない」
脱力して椅子に座り込む僕を、彼女の澄んだ青色がじっと見つめる。
その目を見たくなくて、僕は生徒会長から視線をそらした。
「今はそう思ってくれていて構わない。でも卒業までには来てほしい」
「…行かないって言ってるだろ」
ここまで来ると、もう意地だ。来てほしい、と言われたところで簡単に行けるものではないし、逆にそう言われると行かない、という風になってしまうのだ。
僕は俯いたままじっとしていた。
「じゃあ、まずは私と友達になってくれ」
「は？」
唐突に変なことを言われた僕は、つい顔を上げてしまった。生徒会長が小さく微笑む。…美人だ。
彼女はベッドから降りると、僕が座っている椅子までやってきて、僕の手を取った。
いきなりのことに、顔が熱くなる。
「なっ…な！」
ぱくぱくと間抜けに口を開閉する僕に、生徒会長はそっと言った。
「私の友達になってくれ。別に学校には来なくていい、とにかく私と友達になってほしいんだ」

「い、…いやだって言ったらどうするんだよ」
心臓がばくばく煩い。僕は目の前に迫る生徒会長の端正な顔に釘付けになりながらも若干の抵抗を見せた。
このまま言いなりのように友達になるのは嫌だったのだ。
「それは困るな。私の友達1号がいなくなってしまう」
「…あんた、友達いねぇの？」
想像とは少し違う答えに驚きながら聞くと、生徒会長は少し寂しそうに笑った。
「頼りにする生徒、というのは友達ではないだろう？」
「……でも、頼りにされてるんだろ」
「まぁな。だが私は、普通に放課後に遊んだり、お茶を飲んで話せる友達が欲しいのだ」
「ふぅん…」
ということは、彼女にはそういう友達はいないと言うことになる。
…こういう話を聞くとどうにも無下に出来なくなるのは、僕の悪いところだ。
「別に…いいけど。友達くらい」
気付いたら、そう答えていた。答えた後に、しまった、と思う。
「ほんとか！？」
「え、いやっ、違ッ」
「ありがとう、奏！」
「ぅ…」
否定しようとした僕の手をぎゅ、と握り締めて、生徒会長は笑った。その顔がちょっと可愛かったりしたもんだから、僕は答えることも出来ずに結局彼女の友達となってしまったのだった。
…つか、いきなり名前呼びかよ！

あれから2週間。彼女は毎日放課後になると僕の家に来るように

なった。
親には言ってない。どっちにしろ会うことはないから、言う必要もないと思ったし。
「かなでー！今日は生徒指導の先生からおせんべいを貰ったぞ！」
友達になろう発言から、一度も学校に来いとは言わなくなった生徒会長。当初の目的を忘れてるんじゃないかと思いつつも楽しかった僕は、何も言わずに彼女と普通に『友達』をしていた。
がさがさとスーパーの袋を揺らしながら、彼女は新しくした僕の部屋の窓（代金は会長持ちだ）から入ってくる。…普通に入って来れないのか。
「…生徒会長のくせに先生から何貰ってんだ」
「くれるものはしょうがない。それに、今の私は生徒会長ではない。ただの八城くづゆだ」
「へーへー、そうですか」
ポットの湯を急須（生徒会長持参）に入れながら答えると、彼女はやけに子供らしい仕草でむ、と膨れた。
大分僕たちは友達としてゆったり過ごせるようになってきていると思う。
学校にいけば、もしかしたらこんな友達がもっと増えるのかも、と思いつつ、僕はお茶を入れたコップを渡した。
「ところで奏。今日はちょっとした頼みがある」
「何？」
椅子に座りながら聞くと、生徒会長は少しためらいがちに呟いた。
「奏に、…うちの副会長をやってもらいたい」
「…へ？」
「だ、だめならいいんだ。奏に無理をさせるつもりはないし、仕事は私だけで十分出来てる」
いつになく不安そうに呟く生徒会長に、僕は協力してあげたい、とは思ったけれどそれは出来そうに無い。
やっぱりまだ、学校と関わるのが怖いんだ。

「…ごめん、ちょっと…無理かも」
「そ、…そうか。ならいい」
僕の言葉に、彼女は少ししょんぼりした笑みを浮かべていて、悪いことをしたような気分になる。けれどこれだけは気持ちの問題だし、どうにも出来なかった。
きまずい沈黙が流れる。
「…ぇ、と」
さすがにきつい、と思った僕が口を開いた瞬間、生徒会長が立ち上がった。
「か、かなで！」
「え…何？」
黒い長髪がさらさら揺れる。
「…もう一つ、頼みがあるんだ」
「頼み？」
僕が首を傾げると、生徒会長は少し顔を赤くしながら小さく呟いた。
「…私の、名前を呼んで欲しい」
「え」
つられて僕も赤くなる。お、女の子の名前を呼ぶ！？
「…私には友達がいなかったから…、名前で呼び合ったりとかしなかったんだ。…だ、だから、奏とは名前で呼び合いたい」
「あ、そ、そっか！…え、と、じゃあ…くづゆ？」
ものすごく恥ずかしい思いをしながら小さく名前を呼ぶと、生徒会長、もといくづゆはぱぁ、と嬉しそうに微笑んだ。
「ありがとう」
「え、ぁ…まぁ、と、友達だしね」
「そうだな！」
本当に嬉しそうに笑うくづゆにこっちまで嬉しくなって、友達っていうのも悪くないな、と僕は思ったのだった。

そんなことがあった次の日。突然にくづゆが来なくなった。
その次の日も、そのまた次の日も。
何かあったんだろうか、と最初は心配して、そのあと僕は一つの結論に達した。
『くづゆはきっと僕に飽きたんだろう』と。
そう思ったほうが、他に考えたいくつもの理由の中では一番良かったのだ。
僕の生活は前のように戻った。昼過ぎまで寝て、ゲームして、漫画を読む。
「…つまんねぇ」
ただ、前と違ったのは、くづゆがいないこと。そしてそのせいで、前まで楽しかった生活が何も楽しくなくなったこと。
いつの間にか、僕はくづゆと一緒にいるのが嫌じゃなくなったどころか、くづゆと一緒にいたいと思っていたことに気付く。
…どうして、くづゆは来ないんだろうか。
僕に飽きたんだ、と結論付けるのは簡単だ。けれど、あの二週間の間で、くづゆがそんな人間じゃないことは分かっていた。
きっと何かがあったんだろう。だけど学校に行ってない僕には、その『何か』が分からない。
…。
くづゆはもう5日も来ていない。今日は金曜日だ。くづゆの家を知らない僕には、明日明後日はくづゆに会えないことは分かっている。
…今日、なら。…学校にいけば、もしかしたら。
「…馬鹿じゃないのか」
あんなに学校に行かないって言ったくせに、二週間、女子と遊んだぐらいで行くのかよ。そんなもんだったのか？僕の決意は。

そう呟いた僕の心の中に、僕は何か違和感を感じた。
「……決意って、なんだよ」
学校に行かない決意。…なんてくだらない決意なんだろう。こんなのは決意じゃない。違う。
僕はベッドから跳ね起きると、タンスの奥から制服を引っ張り出した。
しわくちゃのパジャマを脱ぎ捨てて、ワイシャツに袖を通す。どこに置いたか分からないネクタイと鞄も引っ張り出すと、僕はぐちゃぐちゃの髪を手で梳いて下まで降りていった。
明日も明後日も、待てない。今すぐ、会いたい。
ほぼ走るように玄関まで行って、靴箱からローファーをかきだして急いで履く。
もう放課後だ。もしかしたら帰ってるかもしれない。
久々に、僕は制服で外に出た。

今までは怖くて入れなかった校門も走り抜けて、事務のおばさんに聞く。
「あのっ、生徒会長ってどこにいますか！？」
いきなりの質問にびっくりしながらも、おばさんは丁寧に生徒会室にいると思いますよ、と教えてくれて、場所の地図までくれた。
急いでそこまで走る。3階の一番奥だった。
「はっ…はぁ…っ」
全然部活もしてない身体には少しきつくて、僕は廊下を荒い息で歩く。上履きは履いてなかった。
廊下を歩く、部活の生徒の視線が痛い。気まずくなった僕は、急いで生徒会室まで走った。
ほとんど脱力した腕でノックを三回。
「…どうぞ」

扉の向こうから聞こえたのは、聞きなれたあのハスキーボイス。
「失礼しますっ」
出来るだけはっきりした声で僕はその扉を開けた。

そこにいたのは、くづゆ、一人。

「…か、かなで！？」
いつになくびっくりした様子で、くづゆは机の上が見えなくなるまでの書類に埋もれていた。
…仕事は十分に出来てる、なんて嘘だった。
久々に見たくづゆの顔は僕が見ても分かるほど疲れきっていて、目の下には隈が。
「くづゆの嘘吐き。仕事出来てねーじゃん」
「…大丈夫だ、私は生徒会長だから、出来てる」
そう言ったくづゆの顔は泣きそうだった。綺麗なハスキーボイスも、震えていて台無しだ。
「奏は、どうして…来たんだ？あんなに嫌がってたのに」
がらん、とした誰もいない生徒会室の椅子に座る。
ちょっと言うのは気恥ずかしいと思いながらも、僕はくづゆを見つめて言った。
「くづゆが、家に来ないから」
「え…」
「来ないから、もういいのかと思って、それで、不安になって、来た」
「…そ、そう、か」
ぎくしゃくと答えたくづゆは顔を赤くして書類の整理に入ってしまって、僕は何をしたらいいのか分からなくなる。
…。
「くづゆ！」
僕はとあることを『決意』して、立ち上がった。くづゆがびっく

りした顔で僕を見上げる。
「僕、副会長やるよ。この前断っておいて、何だけど」
「本当か！？」
「…うん」
微笑んでみせると、くづゆは嬉しそうに僕に微笑み返した。
この日、僕は風鈴高校生徒会副会長になった。

色々どころか全部が全部大変なことばっかりだろうけど、くづゆとなら頑張れると思った。
まずは、引きこもり脱出からだ！
と、僕はその日、改めて、新しい思いを『決意』したのだった。

卒業式に、見事引きこもりを脱した僕がくづゆに告白するのは別の話。

頑張れ生徒会長！

いきなりカミングアウトするが、私は生徒会長だ。ほんの1ヶ月ほど前に就任したばかりのひよっこだが、仕事はきちんとこなしていると思う。

…ん？別にカミングアウトではない？そんなことは無いだろう。カミングアウトとは隠していたことを発表するということ、だそうだから、私にとってはカミングアウトだ。

ところで、私が生徒会長に立候補する、と言った時のクラスメイトは対して驚いていなかったな。それどころか笑いながら「やっぱり！？」と言われた。

…何故だろう。

まぁそんなことはどうでもいい。今は雑務を片づけなくてはならないのだ。

風鈴中学校は、生徒会およびその役員に生徒に関する雑務を任せるというのが伝統らしく、今もその伝統に乗っ取って生徒関連の雑務は私に任されている。

私に、という言い方はおかしいと思うかもしれないがこの生徒会室には私しかいないのでそれで合っている。

役員は生徒会長が直々に選ぶらしいが、私には仕事を任せられるような知り合いがいなかったから全部私がすることにした。役員の仕事はやっぱり地味なものが多いから、わざわざあまり親しくない人に頼むのも気が引けたのだ。

「ん…っ」

肩が痛くなってきたので、ゆっくりと伸びをする。机の上の書類は、最初の半分以下まで減っていた。

こういう仕事は好きだ。私には友人がいないから、放課後の時間

はまったくもって暇になってしまう。その時間を潰す趣味もない私には、この仕事は大変合っているとも思う。
「…やっぱり、友達は欲しいんだがな」
肘をついた右手に頬を預けて、小さくため息を吐いた。
私の性格ゆえか、頼りにされることはあっても放課後に「遊ぼう」と誘われることは無い。
もう少し中学生らしい生活をしたいものだ…。まあ、こんなことを考えている時点で無理なのかもしれないが。
「はぁ…」
再びため息を吐いた瞬間に、生徒会室の扉がノックされた。珍しいことに、来客だ。
「どうぞ」
書類に目を通すふりをしながら答える。聞こえるかどうか分からない程の声量で「失礼します」という声が響いた。
ぎ、と重そうに扉が開く。ゆっくりと身体を滑り込ませてきたのは丸眼鏡の男子生徒だった。胸ポケットのワッペンから察するに私と同じ三年だ。
「あの…相談なんですが」
弱弱しい声で呟く男子生徒はどうやら私に若干怯えているようで、少し寂しくなりながら私はなるべく優しく見えるよう微笑む。
「今、茶を淹れよう。そこのソファに座っていてくれ」
「あ…は、はい」
何故か私と対峙する生徒は敬語が多い。同学年なんだからもっと打ち解けて欲しいものだ。生徒会長だから仕方ないのかもとは思うが。
茶色い革張りのソファに座る生徒にお茶を入れた湯飲みを渡す。彼は小さく頭を下げてそれに口をつけた。
「で、相談とはなんだ？」
私も同じように口をつけてから傍の茶菓子を引き寄せる。男子生徒は俯いたまま眼鏡の奥から私を見つめた。

「えっと…僕のクラスメイトの話なんです、けど」
「クラスメイト？」
「はい。で、でも今はクラスメイトじゃなくて一年の時にクラスメイトだったってだけの話なんですけど…」
「ふむ」
男子生徒は何かを話そうとしたが、その前に顔を上げて私を確かめるかのように見た。
なんだ、と首を傾げると、彼が小さく呟く。
「生徒会長は、小さな相談にも乗ってくれるって…言ってましたよね、選挙のとき」
「あぁ、言ったぞ」
「どんなくだらないことでも、ですか？」
「勿論だ」
「本当に？」
何度も確かめてくる男子生徒に、私は微笑んだ。
「私に二言はない」
「…じゃあ、話します」
少し安心したように顔を緩めた男子生徒は、何度も茶をすすりながらぽつぽつと話し始めた。

その話を要約すると、なんと『私の』学校には不登校生徒がいるのだそうだ。
相談に来た生徒は昔その不登校の生徒に優しくされたそうで、そのことを感謝していて、もう一度学校に来てもらいたい、とのことだった。
卒業式がある三年生の一年間は中学校生活の中でもとりわけ大事だとは私も思う。
何の思い出もなく卒業させたくはないのだそうだ。
ふむ、心優しい生徒もいるものだな。

感心していた私の前で話し終えた男子生徒は、飲み終えた湯飲みを握り締めたまま座っていた。
そこで私はあることに疑問を抱く。
「…一つ聞いてもいいか」
「は、はい」
こういうことを聞くのはもしかしたらとても無粋なことなのかもしれない。
「その生徒は、どうして学校に来なくなったんだ」
そう思いながらも問うた私に、男子生徒は一瞬固まってしまったのかと思うほど身体を硬直させた。
丸眼鏡の向こうの瞳が、見て分かるほどに動揺で揺れる。
「それ、も…話さなくちゃ駄目ですか」
「…無理にとは言わない」
私の言葉に、男子生徒は数分黙り込んでから、口を開いた。
「その生徒…多野くん、って言うんですけど…すごく、頭が良かったんです」
「優等生だったのか」
「いえ…まぁ、優等生でしたけど、明るくて、クラスの中心みたいな人でした」
「ふむ。良い生徒だな」
率直な感想を述べると、男子生徒はまるで自分が褒められたかのように照れくさそうに微笑んだ。
なんとも素直な良い生徒だ。
「…でも、あいつらのせいで」
微笑んでいた男子生徒は、呟いた言葉のトーンと同じように暗い瞳で俯いた。
「あいつら？」
聞こえた言葉を反芻する。男子生徒は弱弱しく頷いた。
「多野くん、凄く目立つ人だったんです。だから、クラスの男子が気に入らないって言い始めて」

「…よくある嫉妬心から来るやつだな」
「はい。始めはその数人だけで多野くんを無視したりしてたんですけど、徐々にクラス全体に広がっていって…」
おそらくは彼自身も、その『多野くん』を無視してしまったのだろう。そうしなければ『多野くん』と同じ扱いにされてしまうから。
そして今、いや、ずっとそのせいで不登校になった『多野くん』に対する罪悪感のようなものがあった…というところでだろうか。勝手な推測だがあながち間違ってはいないだろう。
「多野くんが不登校になってしまった時には、もう遅かったんです」
「典型的ないじめか。そしておそらく担任が戻そうとしたんだな？」
男子生徒は、口を開かずに首を縦に振って答えた。
「でも『多野くん』は戻ってこないまま…ということか」
私が呟いた言葉に俯いたまま何も言わなくなってしまった男子生徒。
自分がいじめられたわけでもないのに随分と心を痛めているらしい。本当に『多野くん』に感謝しているようだ。
私もこういう友達が欲しいものだ…などと考えながら、私はガラス張りのテーブルに湯飲みを置いた。
「そうだな。私は生徒会長だから、生徒の悩みを解決しよう」
男子生徒は不安そうに私を見上げた。…意外にも小さいな。いや、背丈の話なんだが。
「必ず、『多野くん』に学校へ来てもらおう。私の学校は、全校生徒および全職員そろって初めて『私の学校』となりえるのだから」
「あ、えーと…？と、とりあえず、お願いしますっ」
彼はあまり私の言いたいことが分からなかったらしいが、深く頭を下げた。
「任せておけ」
にっこり微笑んだ私に何故か男子生徒は顔を赤くしながら頷く。
そしてその顔のまま立ち上がると、もう一度礼をしてから生徒会室を出て行ったのだった。

「さて…後の書類も片付けるか」
生徒会長としての初の大仕事となるだろう『多野くん』に万全の体制で挑む前に、きちんと仕事を終わらせなければならないからな！

次の日、私はさっそく先生に聞いて『多野くん』の住所を突き止めた。
ちなみに『多野くん』は『多野奏（かなで）』というらしい。素敵な名前だな。
校門を出て、地図を見ながら歩を進める。ちなみに授業はサボった。きちんと早退届は出したからいいだろう。私は皆勤賞ではないし。
地図と一緒に持ってきた顔写真に書いてある名前をもう一度見ながら私は少しだけ羨ましく思っていた。
私は、自分の名前が好きではない。
『くづゆ』というのは、母親が好きだった飲み物らしく本当は「葛湯」と書いて「くずゆ」と読むそうだ。「ず」が「づ」になったのは母親の単なる趣味で、可愛かったから平仮名にもしたと聞いた。
私も小さい頃はその名を気に入っていたが、小学校に入ってから途端に嫌いになった。
当時泣き虫だった私はよく男子にいじめられ、あだ名が「くず」だったからだ。
子供というのは何も考えずに人を傷つけることが多々ある。
中学に入った今では向こうも私に何もしないから、忘れることにはしているが。
「おっといけない」
思考にふけっていたせいか、曲がるはずの角を曲がり損ねた。
ゆっくりと戻って、道を曲がる。よくある住宅街で、似たような

建物が道の両端に並んでいた。
『多野くん』の家は少し奥のほうだ。
地図を見ながら進んでいくと、灰色の石に白く『多野』と彫られた表札が目に留まる。
「ここだな」
確認してから、私は迷わずインターホンを押した。
…返事はない。
両親は共働きだそうで、今はお昼だからまだ家にいるだろうと思って来たのだが。
もしかしていないのだろうか。そうすると、サボった分が見事無駄になってしまう。
もう一度押す。しん、とした家の中から、乱暴に階段を下りる音が聞こえてきた。
「ふむ、居留守を使うつもりだったようだな」
さすがは不登校だ。と、ちょっと外れた感心をしていた私だが、一向にインターホンから答える声は聞こえない。
あくまで無視するつもりか、と少し乱暴に押した直後、がちゃ、という音が聞こえた。
しかしその後は無言。どうやらこちらから仕掛けねばならないようだ。
咳払いをして、気合を入れる。
「風鈴中学三年、生徒会長の八城くづゆだ。君は多野奏くんだな？」
数秒の沈黙の後、「はい」と小さく聞こえてくる。…なんでこいつも敬語なんだ。
ふむ、まぁいい。私はインターホンに向けて再度話しかけた。
「『私の』学校で現在不登校となっている生徒は君一人なのは知ってるか？」
『いえ…知りません』
声が少し不機嫌になった。おそらくは私の言い方が気に障ったの

だろう。
すぐに直せるものではないから仕方ないのだがな。
「そうか。ならそのことで話があるんだが…」
出来れば家に上げて欲しい、という前に、インターホンから返事が返ってきた。
『言っておきますが僕は学校へ行くつもりはありません、その話はするだけ無駄です。それじゃ』
ぶつ、という音と共にあっという間に切れてしまった会話。私は若干の苛立ちを覚えた。
人が全部言い終える前に切るとは何様だ。そもそも、『するだけ無駄』な話など無い。
「…こんなことで諦めると思ったら大間違いだぞ、多野奏」
玄関の門を開けて中に入る。このさい不法侵入などと言ってはいられん。
二階だろうと目星をつけた彼の部屋を見つけようと裏庭へ回る。
下から見上げると、締め切った窓のカーテンが一部屋だけ揺れていた。

…あそこか。

この後私は二階の部屋の窓を叩き割って彼の部屋へ侵入するわけだが、どうかその方法だけは聞かないでくれ。
…ちょっと恥ずかしいからな。

「…なんのようですか」
勉強机の椅子に座った多野奏を、私は彼のベッドの上に座って見つめた。
ちなみにきちんと靴は脱いである。そこまで無礼ではない。

「君に学校に来てもらいたい」
「…お断りします、って言いませんでしたか」
「なぜだ」
あからさまに顔をしかめてカップラーメンをすする多野奏は、意外にも端正な顔立ちだった。
ぼさぼさの頭とよれよれのパジャマは気になるが、元優等生と聞いていた通り人気の出そうな顔つきだ。
同時に、他の男子から妬まれるというのも分からなくもない。
ラーメンを一口食べ終えた彼は、むす、とした顔で私に向かって呟いた。
「……僕が学校に行かない理由を貴方に教える義務はないはずです」

「そうだな。まぁ私は君の理由は知っているからいい」
「は！？」
私が知っているとは思っていなかったらしい彼は、途端嫌悪感を露にしたような顔で私を見つめた。
自分の嫌な過去を人に知られるのは誰だって嫌だろう。私も嫌だ。
ため息を吐きたくなるのを抑えて、私は冷静な顔で口を開いた。
「私は生徒会長だからな。生徒のことは知る義務がある」
「義務、って…あんたそれプライバシーの侵害だろ！」
怒鳴る多野。ここで私も怒鳴り返したりはしてはいけない。
悪いことをしているのは明らかに私のほうだから、私は何も言わずに多野を見つめた。
「いきなり来て何なんだよ！僕が学校を休むのは僕の自由だろ！？」
「…落ち着け、多野」
「ていうか僕が休んでる理由知ってるならわざわざこんなとこまで来ないでまずあいつらを何とかしてくれよっ」
多野が落ち着く様子はない。あいつら、というのは彼をいじめに陥れた奴らのことだろう。
「それは出来ない」

「何で！」
私に苛立ちをぶつけるように睨んでくる多野に、静かに答えてやる。
「私が解決したところで同じことの繰り返しだからな」
「……」
多野が沈黙する。
「私は、『私の』学校で不登校がいるのがとても悲しい。それが一人だけならなおさらだ。だから今日、私は生徒会長になって初めての大きな仕事を、君に学校に来てもらうことに決めたのだ」
「…僕は行かない」
ぐったりと、何かを諦めたように椅子に座る多野を、私は見つめる。
私と視線が合った多野は、ゆっくりとそれを外した。
「今はそう思ってくれていて構わない。でも卒業までには来てほしい」
「…行かないって言ってるだろ」
多野はどうしても行く気はないらしい。
困った私は、とあることを思いついた。俯いたままの多野に声をかける。
「じゃあ、まずは私と友達になってくれ」
「は？」
多野が顔を上げた。友達、というフレーズに、私はつい顔が緩む。
私と友達になってくれれば、友達が出来たことによって多野が学校に来てくれるかもしれない。それに、私にも友達が出来て、一石二鳥だ。
私はベッドから降りると、椅子に座ったままの多野の手を取った。
そういえば、男子の手を取ったのは初めてだ。やっぱり、私の手とは違うものだな。
「なっ…な！」
手から多野の顔に目線をずらすと、多野は顔を真っ赤にして金魚

のように口を開閉していた。
「私の友達になってくれ。別に学校には来なくていい、とにかく私と友達になってほしいんだ」
「い、…いやだって言ったらどうするんだよ」
多野の答えに、私は少し寂しくなる。
「それは困るな。私の友達1号がいなくなってしまう」
「…あんた、友達いねぇの？」
私が言うと、多野は若干目を見開いて、少しだけ心配そうに聞いてきた。
一瞬クラスメイトの顔が浮かぶ。
「頼りにする生徒、というのは友達ではないだろう？」
「……でも、頼りにされてるんだろ」
「まぁな。だが私は、普通に放課後に遊んだり、お茶を飲んで話せる友達が欲しいのだ」
「ふぅん…」
視線をそらしながら小さく呟いた多野は、少しの間黙ったあと、口を開いた。
「別に…いいけど。友達くらい」
思わぬ返事に、私のテンションが上がる。
「ほんとか！？」
「ぇ、いやっ、違ッ」
「ありがとう、奏！」
「ぅ…」
ぎゅ、と手を握り締めて心から礼を言うと、奏は少し不服そうな顔をしながらも私の友達になってくれたのだった。
さぁ、これで名前呼びが出来るぞ！

あれから2週間。私は放課後になると奏の家へ行くようにしている。

それ以外は私の学校生活にこれといった変わりはないが、今日はなんと生徒指導の先生におせんべいをもらってしまった。
嬉しくて、少しスキップしながら奏の部屋まで行く。直した窓から入るのは、もう私の中では習慣になってしまって、毎回窓から入っていた。
毎回奏は変なものを見るような顔で私を見るが、気にしてはいない。
「…生徒会長のくせに先生から何貰ってんだ」
奏に急須とおせんべいを渡すと、もう決まりきったように彼は急須に茶葉と熱湯を入れ始める。別におせんべいは欲しくてもらってるんじゃないんだが。
「くれるものはしょうがない。それに、今の私は生徒会長ではない。ただの八城くづゆだ」
「へーへー、そうですか」
まるで私が欲しがっているように言われたのが気に食わなくて言い返してみると、小さな子供に対するような態度で返されたので、私は一人でむくれた。
そんな私を見て、奏が笑う。
この頃の私たちは、だいぶ友人らしくなってきたと自分でも思っていた。
ほうじ茶の入ったコップを受け取りながら、私はあまり重要なことではない風に言葉を紡ぐ。
「ところで奏。今日はちょっとした頼みがある」
「何？」
椅子に座った奏が問いかけてきて、私は少しためらってから答えた。
「奏に、…うちの副会長をやってもらいたい」
「…へ？」
思ってもみなかったことなのだろう。奏は気の抜けた返事を返してきた。

急いで付け足す。
「だ、だめならいいんだ。奏に無理をさせるつもりはないし、仕事は私だけで十分出来てる」
ただ、副会長をやってもらって、もし学校に来たときに一緒に活動したいと思っただけ。
それはちょっと恥ずかしくて口に出来ないまま、私はしばらく無言でいた。
「…ごめん、ちょっと…無理かも」
「そ、…そうか。ならいい」
奏なりに考えてくれたのだから、それで無理なら構わない。私は心配させないように笑みを浮かべると、そのまま茶をすすった。
…沈黙が気まずい。
「ぇ、と…」
気をつかって奏が口を開いたが、話題が見つからないらしく少し困った顔で目を泳がせる。
そんな奏に、私は立ち上がった。
「か、かなで！」
「え…何？」
少し大きい私の声にびっくりしたのだろう、奏は目を見開いて私を見ている。
「…もう一つ、頼みがあるんだ」
「頼み？」
たった今、ここで思いついた頼みだが。
首を傾げる奏に、少し恥ずかしい思いで私は小さく頼んだ。
「…私の、名前を呼んで欲しい」
「え」
言った後に、これは意外になんというか…恥ずかしい頼みなのでは、と思う。
…男子に名前を呼んでほしいと頼んでいるわけだから。そう考えた途端熱くなった気がして、私はごにょごにょと言い訳のようなこ

とを呟いた。
「…私には友達がいなかったから…、名前で呼び合ったりとかしなかったんだ。…だ、だから、奏とは名前で呼び合いたい」
「あ、そ、そっか！…え、と、じゃあ…くづゆ？」
奏が納得したように頷いて、小さく私の名前を呼ぶ。
なんだか心臓がどきどきして、すごく嬉しい。
「ありがとう」
「え、ぁ…まぁ、と、友達だしね」
「そうだな！」
奏は良い友達だ、と思いながら笑うと、奏も優しく微笑んでくれた。

そんなことがあった次の日の放課後。私は先生に呼び止められた。
「八城」
「はい？」
振り返ると、先生が書類の束を持っていた。仕事だろう。
「これ、頼めるか？まだ机の上にあって、しかもこれ1クラス分だから同じようなのが6束あるんだが」
「…大丈夫です」
心配そうにいう先生に頷いて、私はその書類の束を受け取った。丁度私の顎の辺りまである紙の束。
受け取った私に、先生が言う。
「今回ちょっと厄介な書類だから、時間かかってもいい。あとの書類は、俺が運んどくよ」
「分かりました。それでは」
たかが紙とはいえこれだけ集まると重量もすごい。私は若干汗を

かきながらそれを生徒会室まで運んだ。
ちょっと厄介な書類…と言っていたが、どういう意味だろう。
不思議に思いながら書類を見た私は、その意味を理解した。
生徒一人一人別々の手続きが必要なものらしい。今までもこういう書類は少しあったが、…全クラス分のは初めて見た。
この分だと、今日からはしばらく奏のところへは行けないだろう。
「…早く終わらせるべきだな」
奏と会えないのは寂しいから。
ふぅ、と1つ息を吐いてから、私は自分に気合を入れてその書類を片付け始めた。

そうして、かれこれ五日ほど過ぎている。
書類は学校だけでは終わらず、家に持ち帰って夜までやって、やっと一日に一クラス分終わる、と言った感じだ。
さすがに疲れが来ている。…奏は、今どうしているだろうか。
私は奏の連絡先をあいにく知らないので、連絡が出来ていなかった。
きっと心配しているだろう…いや、でも。
「前の生活に戻ってしまうだけだろう…な」
私にとっては奏は大事な友達だが、奏にとってはそうじゃないかもしれないのだ。
勝手に押しかけて、友達になって、私が会いに行かなければ会えない。
それは思えば当然の話なのだけれど、今の私にとってはそれなりにショックだった。
「はぁ…」
小さくため息を吐く。そんな時、生徒会室の扉が3回鳴った。
来客だろうか。
「…どうぞ」

今は人の相手をする気にはなれない、と思いながら答える。
そうして書類に視線を落とした私は聞こえてきた「失礼しますっ」という声に弾かれたように顔をあげた。
扉を開けて入ってきたのは、奏だった。
「か、かなでっ！？」
少し期待はしていたけれど、まさか。
「…くづゆの嘘吐き。仕事出来てねーじゃん」
少し笑って、ちょっとだけ馬鹿にしたように行った奏に、私は泣きそうになる。
「…大丈夫だ、私は生徒会長だから、出来てる」
やっとのことで答えた私に、奏は苦笑していた。
「奏は、どうして…来たんだ？あんなに嫌がってたのに」
生徒会長の席の前のソファに、奏がゆっくり座る。
意外にもすんなりと溶け込んでいて、私は奏が副会長になってくれたらこんな感じかもしれないとぼんやり思った。
「くづゆが、家に来ないから」
「え…」
「来ないから、もういいのかと思って、それで、不安になって、来た」
「…そ、そう、か」
奏が苦笑したまま言う。考えてもいなかった答えに、私は顔が熱くなるのを感じながら誤魔化すように書類へ視線を向けた。
…。
「くづゆ！」
しばらくの沈黙のあと、奏が立ち上がる。
いきなりのことにびっくりしながら、私は顔を上げて奏を見つめた。
奏が、少し照れくさそうに小さく呟く。
「僕、副会長やるよ。この前断っておいて、何だけど」
「本当か！？」

「…うん」
少し自信はないけど、と呟きながら微笑んだ奏に私も微笑む。
この日、たった一人だった生徒会は二人になった。

まだまだ奏には大変なことばかりだろうけど、それは私や周りがサポートすればいい。
一人じゃ出来ないことも、奏となら出来る気がする。
さて、これから色々頑張らなくては！
私はこれからの日々に胸を高鳴らせて、目の前に書類に励んだのだった。

卒業式に、胸の高鳴りが奏に対する恋愛感情だと気づかされるのは別の話。

夏だ！アレだ！会計だ！　１（前書き）

題名の通り今回で会計が見つかります！

夏だ！アレだ！会計だ！　1

初めましての方は初めまして、顔見知りの人はこんにちは、元・引きこもりの多野奏（かなで）です。
残り7ヶ月となった受験シーズンまっしぐらな中3の夏をなぜか1、2年に代わることもなく生徒会副会長として過ごしております。
暑いし勉強は大変だし生徒会の仕事で夏休みも学校に来なくちゃで思ってた以上にハードな学校生活を送ってます…。
すごく大変で、時々引きこもりに戻りたいと思うこともありますが、生徒会長である彼女と一緒に活動するのはとても楽しいです。

そう、僕を引きこもりから学生へと戻してくれた、八城（やしろ）くづゆと。

風鈴中学の生徒会室は3階にあるため、1階の資料室からこういったダンボールを運ぼうとすると物凄く疲れることになる。
生徒会メンバーが僕とくづゆしかいないことも相まって、一人一人の運ぶ量と時間が増えるのも難点だ。

「う、わっと…！」

階段を上っていた僕はダンボールで足元が見えずに一瞬段を見失った。
ぐらついた僕の口から零れた声に、少し上を歩いていたくづゆがダンボールを抱えたまま振り返る。

「奏っ？平気か？」

長い黒髪がさらりと揺れて、青い瞳が心配そうに僕を見つめた。
ぐらついたものの大したことはなかったので、僕はそれにへらりと笑って返す。

「平気。少し下が見えなくてさ」
「そうか…悪いな、やはり部屋で待っていてもらえば良かった」

そう言って眉根を寄せたくづゆに、僕は少し呆れてため息を吐いた。
3段上って、隣に並ぶ。

「それはこっちの台詞。くづゆは女の子なんだし、こんな重いもの持つより部屋で書類整理とかしてれば」
「…私は生徒会長だからな」
「いやそれ理由になってないって」

苦笑してツッコミを入れてみた僕だったが、再び階段を上り始めたくづゆの頬が少し赤くなっていたから、もしかしたら照れてるだけなのかもしれない。
それにしてもくづゆには少しそういう…女の子としての自覚が足りない気がする。
彼女自身が言ってた通り女の子の友達がいないことも関係あるのかもしれないし、基本的に一人でなんでも出来てしまうことが理由かもしれないけど…僕としてはもう少し自分が女の子なんだってことを自覚してほしい。
ってこれじゃくづゆの兄か父かじゃないか…。
一人で失笑していた僕を、隣のくづゆが不思議そうな顔をして見

ていた。

「…これで全部か」

あれから３０分。今回使う全ての資料を運び終わった時には、僕もくづゆも汗だくになっていた。

幸いにも生徒会室にはクーラーが付いているのであと何分かすればすぐに涼しくなって汗も引くだろう。生徒会室万歳だ。

生徒会長の机に3個、僕の机に2個置かれたダンボールは、とりあえず見なかったことにして僕はクーラーの前に立つ。

冷えた空気が顔を撫でた。

そんな僕の後ろで、くづゆが麦茶とお茶菓子を用意し始める。

「それにしても、今年も暑いな」

「んー…そうだね」

「生徒会の活動も半年ほどか」

「…風中は生徒会長いから、そうなるね」

「奏は、他のメンバーも欲しくないか？」

「え？」

唐突な問いに、僕はくるりと後ろを向いた。

ガラスのコップを置くくづゆは、その手にある麦茶を見ているような顔でどこか遠くを眺めている。

「…別に奏と2人でも構わないんだが、机が空いているというのは少し寂しい気がしてな」

「そりゃ、入ってくれたら嬉しいけど、3年はきっともう入ってくれないと思うよ」

「…ああ」
「入ってくれるとしたら2年とか、そこらへんかな」

3年生で生徒会に今から入る気になってくれる人はいないだろう。勉強だってあるし、生徒会はテスト前にも仕事があることが多いし、その両立をすることが大変なのは僕が何よりこの身をもって知っている。

丸2年間学校を休んでいた僕は、出席日数だって全然足りてないしテストも受けてないから通知表だってぼろぼろなので、放課後毎日補習と作文を書かされているのだが、これを生徒会と両立しようとするのはかなり難しい。

1年の時の成績が功を奏してなんとか通知表の方はなんとかしてくれるそうなのだが、ちゃんと公立の高校にいけるかといえばまだまだ不安なところだ。

今度のテストと生徒会での仕事ぶりにかかってる気がする。

「…まぁ、あと半年だしな。なんとかなるだろう」
「多分ね」

苦笑して返すとくづゆも小さく笑った。

「お菓子は月餅とチョコレートクッキー、どっちがいい？」
「あ、月餅」
「じゃあ月餅だな」

木の盆から月餅の入った袋が2個取り出されて、それぞれのコップの横に置かれた。

クーラーの前から移動して、僕は青いコップの前に座る。

ぴ、と月餅の袋を開けて口に含んだところで、くづゆの隣に置いてある内線用の電話が鳴った。

２コール目に入る前に、くづゆが受話器を取る。

「はい、生徒会室です」

何のようだろうか、と少し不安になりながら見つめていた僕の視線の先で、くづゆの眉間に皺が寄った。

「…隆久、内線に私用電話をかけるな」

くづゆの綺麗なハスキーボイスがいつもより数段低くなる。その理由はくづゆが呼んだ隆久、という名前でよく分かった。

間宮隆久（まみやたかひさ）。

生徒会を担当する教師の一人で、俺様な性格と顔と若さで我が風鈴中学の女子の半分をとりこにしている国語科担当だ。

授業内容も文句は言えないんだが、とにかく常識で測れないことをする奴なので、僕は少し苦手だったりする。

「何？……アホか、私は今奏とお茶してるから邪魔するな、っ、おい、隆久！」

叫ぶように名前を呼んだくづゆは、耳から離した受話器を数秒見つめてから、普段滅多に聞くことの出来ない舌打ちをした。

そしてそのあと僕に気づいて、わたわたと受話器を元に戻す。

見られたくないものを見てしまったらしい。僕は苦笑しながらそれを見なかったことにした。

「どうかしたの」

「…隆久が来るらしい。職員室じゃゆっくり出来ないんだと」

「あー…お茶でも出してあげる？」

「あいつにか？」
「僕なら出さないな」
「私もだ」

出さなくても勝手に飲んでいくんだから、と笑った僕の前で、くづゆはむ、とした表情になる。
くづゆとあいつは家が近いこともあって小さい頃から知り合いらしいのだが（くづゆのハチャメチャなところはきっとあいつ譲りなのだろうと僕は踏んでいる）、その小さい頃に何かされたらしくくづゆはあいつを酷く毛嫌いしていた。
嫌いといってもまぁ、心の底から嫌いというわけではなくて、あれだ、今流行りのツンデレという奴だ。ちなみに僕はツンデレは嫌いじゃないがクーデレ派だ。ってどうでもいいか。

「まったく…あいつも教師なんだから女遊びはやめろというのに」
「え、女遊びって…」
「…私の家から良く見える。週に一回は連れてくる女性が変わってて、」
「そりゃ…うわぁ、…うん」

つまりはとっかえひっかえってわけか。
引きつった笑みを浮かべながらお茶を含んだ僕は、窓の外を見た瞬間にそのお茶を吹きそうになった。吹きそうになっただけで吹いてはない。ナイスだ僕。
さて、問題は窓の外に何があったか、だが、次のうちどれでしょう。

1：間宮隆久。2：国語科の教師。3：生徒会担当教師。さぁ、どれ。

ん？全部一緒だって？その通りだよ。
僕は立ち上がると不思議そうに首をかしげているくづゆの隣を通り抜けて窓のほうへと寄った。
がら、と開けるとロープを掴んだ間宮隆久が一見無邪気そうな笑顔を見せる。しかし顔がかわいい系ではないので不気味だ。
そもそもかわいい系の男子なんて２０過ぎているんだろうか。かっこかわいいが限度だろう。

「…何やってんですか、先生」
「プールの監視員終わったから来たんだよ」
「……ロープで？」
「おー。ちょっとそこどいとけー」

とん、と壁を蹴った隆久に僕は急いで脇に避ける。振り子の原理で勢いをつけた隆久は、開いたままの窓から滑らかに生徒会室の中へと着地した。
床に余っているロープの部分をくるくると巻いて、ぽい、と外へ投げて垂らしてから、窓を閉める。

「よぉ、くぢゅー」
「私の名前はくづゆだ。くぢゅーじゃない」
「いーじゃねえか。灰皿あるかー？」
「仮にも教師が生徒の前でタバコを吸うな！」
「俺はくぢゅーたちなら俺が吸っててもタバコなんて吸わないだろうなァと信頼して吸ってんだよ」
「嘘だな」
「てかここ涼しいなー」
「人の話を聞けぇぇぇっ！」

隆久が来ると途端にくづゆのテンションが変わるので僕は少し複

雑な気分になる。
やっぱり昔からの付き合いだから素でいれるのかなぁとか、そんなことを考えてしまって。
僕は目ざとく灰皿を見つけた隆久の手からそれを奪い取って、下の戸棚に仕舞いなおした。隆久のブーイングが飛んでくるが元から吸う気がないので、あきらめたふりをして来客用のソファに座る。

「…で、何しに来たんですか」
「え、用がなきゃ来ちゃいけねぇの」
「僕らこれから書類整理とかあるんで邪魔なんですが」
「まぁまぁそういうなよ。良い話あるんだぜ？」
「…良い話？」
「どうせろくな話じゃないんだろう」

僕が首を傾げて、くづゆが隣で刺々しい声をあげた。そんな僕らを見て、隆久がにやりと笑う。
ぱっと見どこかのマフィアとかそれ関係の人に見えそうなほど性質の悪い笑みに、僕はつい2、3歩下がってしまった。

「…生活室の幽霊って知ってるか」
「生活室の幽霊？」
「…知らんぞ。それが私たちにとって良い話なのか？」

訝しむくづゆに、隆久が足を組み替えて人差し指を立てる。

「生活部の奴らが困ってるらしくてな、編み物や縫い物の時にデザインが勝手に変わってたり、シチューを作る予定だったのにビーフシチューになってたりするらしいぜ」
「…別にそんくらい良いと思うんですが」
「ま、それだけならまだいいんだけどよ。夜見回りしてるとガスコ

ンロが勝手についてたりするらしいんだよ。下手したら火事になりかねないし、困ってるから助けて欲しいって話だな」
「…困っているのか」
「そう。生徒会長に助けて欲しいんだってよー」

にやりと笑った隆久の視線の先を確認してみれば、案の定ぎゅ、と拳を握り締めたくづゆが。やはり何らかのスイッチが入ってしまったらしい。
僕自身そういうオカルト系は好きではないのだけれど…こうなってしまったらくづゆは『生徒会長として』職務を全うするだろう。
隆久はこれが目的で来たのか、と気づいたがすでに時遅し。

「奏！夏の仕事はこれに決まりだ！」
「え、あー…うん、了解」
「おーし、頑張れよー。無事に解決したら生活部の安芸坂（あげさか）せんせーからカップケーキ貰えっから。いやー楽しみ」
「ってあんたそれが目的かよッ！」
「それ以外に何があんだ」
「ねぇだろうな！」
「ぴんぽんぴんぽーん。んじゃ、麦茶飲んで帰るわ俺」

ひらひらと片手を振った隆久はあろうことかくづゆのコップに入った麦茶を飲み干して（何やら計画を立てていたくづゆはまったく気づかなかった）再びロープを伝って帰っていったのだった。
…なんだか上手くのせられた気がしなくもない。ていうか乗せられたのだろう。
つーかロープで移動してるけどここ3階ですからね、あの常識外れめ。

何はともかく、僕とくづゆは幽霊退治？をすることとなりました。

つづく。

夏だ！アレだ！会計だ！　１（後書き）

久々過ぎて奏のキャラとか変わってます。くづゆと慣れて、柔らかくなったんです、きっと。

隆久くんは大好きなので必ず出てきますよ！↑

俺様受けな話も時間があれば書き直してみようと思います…

元データ吹っ飛んだのでＯＴＬ

夏だ！アレだ！会計だ！　2

生活室、というのは言うなれば被服室と調理室を半々に合わせたものだと考えてくれればいい。
主に家庭科で使われることと生活部の部室として機能している特別教室だけれども……、まぁまず幽霊が出るような場所ではないだろう。
幽霊が出るっていったら大抵が理科室だとか、屋上のプールだとか、何か事故があって使われなくなった空き教室だったりするものだ。
その上この学校で生活室に幽霊が出るなんて話も聞いたことがないし……。
もしや隆久の作り話じゃ？と陰謀説を勘ぐってみたのだが（あいつは常識で測れない人間なので普通にそういうことをする）、部活で生活室へ行く部員が心底嫌そうな顔をしているのを数度か見るうちにどうやら本当らしい、と思うようになる。
夏といえば確かに幽霊だけどさ……何もこんな忙しい時に出なくたって。

そんなことを思いつつ、僕はなんかのスイッチが入ってしまったくづゆと共に幽霊退治に乗り出そうとしております。

しかし幽霊といっても、今のところ誰もその姿を見たことがないというのが少々引っかかった。
姿自体が見えるものじゃないのかも知れないが、ガスコンロが勝手についたり、料理が変わってしまうくらいなら手間はあるだろうが人間にも出来ることだ。
くづゆもそこは気になっていたらしい。わら半紙に書かれた『計画』の一番最初の項目は「幽霊を見ること」だった。ちなみに2番は「おやつを決める」だった。くづゆは何がしたいんだろう。
とん、とペンで『計画』をさしたくづゆが口を開く。

「まず最初にその幽霊とやらを見なければならんわけだな、奏くん！」
「え、あ…そうですな、隊長」

なんとなくノリで言ってみた隊長、という響きに、くづゆは至極満足そうに頬を緩めた。目がキラキラと輝いている。
明日になったら軍服とか着てくるかもしれないなぁ…、……洒落にならんや、あはは。
この分じゃ当分は書類整理とかは進みそうにない。まぁどうしても出来ないのなら他の先生に任せてもいいみたいだし、なんとかはなるだろう。

「幽霊というのは夜に出るものだから、忍び込む計画も必要なわけだが、」
「いや、昼間に出てるし忍び込まなくても…」
「昼間に出る幽霊なぞ幽霊ではないぞ！小説家になろうの『夏のホ

ラー２００９』でもグロ系以外は大抵深夜か早朝、もしくは暗い場所が舞台だ！」
「いやまぁそうだけど！この小説別にホラーでもなんでもないし！」
「しかし夜の見回り時にも出ているのだから私は夜に幽霊を発見するべきだと思うぞ！」
「べきっていうか、…夜の学校にいるのって結構マズいしさ…」

熱弁し続けるくづゆに乾いた笑みを浮かべた僕のすぐ隣で、内線が電子音を立てた。
ほぼ反射で受話器を取って、耳に当てる。

「はい生徒会し」
『９時までなら学校残ってていいって校長に言われたぜー、心細かったら隆久君を呼』

がちゃん。

何なんだこいつは、と僕は置いた受話器を見つめたまま真面目に考えてしまった。考えるだけ無駄なのですぐに流したが。
そんな僕をきょとんとした顔で見つめていたくづゆが、しばらくの間の後に内線をかけてきたのが誰なのか分かったらしく眉間に皺を寄せる。

「あいつか？」
「うん。この部屋盗聴とかされてるのかな」
「？　何を言われたんだ？」
「９時までなら残ってて良いって、このタイミングで電話してきた」
「９時まで！？　学校にか！」

食いつくのはそっちかい。

僕は口には出さずに突っ込みを入れて、嬉しそうに「おやつはどうしよう！」と言い始めるくづゆを眺めた。
計画表に、おやつは１０００円まで、の文字が加わる。…高いな、おやつ。そんなに食べたいのか、おやつ。

「…くづゆ、もしかして今日行くつもりじゃないだろうね」
「む？いや、そんなことはしないぞ。私は計画犯だからな」
「それは計画的という意味で取ればいいのか」
「そうともいうぞ」

まあ了承も得ずに夜の学校に忍び込もうなどと考えていた時点である程度計画犯（あくまでも正しいのは犯の部分のみである）と言っても差し支えはないだろうな、と思った。
しかし自分で自分を計画犯だと暴露する犯人はあまりいないだろう。
くづゆは犯罪には向いていないなぁ、と僕は改めて確信した。

「奏が忙しくない日に行こう。補修とか、大変なんだろう？」
「え…、あ、ごめん。気ぃつかわせちゃって」
「別に構わないよ。私は計画犯だからな！」

にっこりと笑ったくづゆに、ここでその言葉を使うのはかなり雰囲気にあってないんじゃないか、と僕は苦笑したのだった。

そうして決まった日付は三日後の夜７時。

夏休みとは言え学校にお菓子を持ってくるのは駄目だし（まぁそ

んなことを言っても生徒会室には隆久の用意した菓子が大量にあるのだけれど）、一旦家に帰ってから集まろうということになった。
ちなみに心細くはないので隆久は呼ばない。
呼ばないけれど経費は毟り取っていた。僕じゃなくてくづゆが。
懐中電灯だとか（電気つければ、と言ったら凄い剣幕で「雰囲気がない！」と叫ばれた）、お菓子代とか、幽霊を撮るための使い捨てカメラだとか、そういったものの費用は全部隆久持ちだ。
くづゆは「話を持ち出したのは隆久なのだから当然だ」と言っていたが、僕はなぜあいつがすんなり金を出したのか知っている。
常識外れで俺様なあいつは、あろうことか昔からの親友で同僚で同じ生徒会担当である宮崎先生に全て立て替えさせたのだ。
教師とも思えない行動だ。ほんと、呆れる。
宮崎先生もなんだかんだで拒否しようとしないからな…どこまでお人好しなんだか。
まぁ、親友（なんとびっくり、あの俺様野郎にも親友がいるのだ。世も末だな）なんてものはそんなものだろうから、僕はその件についてはまったく知らない振りをしておいた。

さて、そんなこんなで、僕は今夜の校門前に立っている。

腕時計を確かめれば、7時五分前だった。くづゆは時間に遅れるような人間ではないから、きっと7時前には着くだろう。
夏とはいえ、今年は冷夏で夜だと若干涼しいくらいだ。
別にうちわまで持ってこなくて良かったかな、と思って鞄の中のそれの絵柄を思い出していた僕の耳に、ぱたぱたと駆けてくる足音が聞こえてくる。
目線をそちらへ向ければ、くづゆがその長い黒髪を高く一括りにして揺らしながら走ってくるのが見えた。

「30分ぶりだな、奏」

「あ、うん。そうだね……髪、結んだんだ？」
「え？あぁ、邪魔かと思ってな」
「ふぅん、そっか」

可愛いし似合ってる、と思ったけれど、恥ずかしくて口には出せなかった。
女の子にそんなことを言った覚えがあまりにも少ないし、仮にも2年引きこもってたんだからブランクゆえに人と上手く喋れないことが時たまある。
まぁそんなことを考えていると非常に沈んだ気分になるので、僕は重そうな正門の隣にちょこんとある小さな扉の取っ手に手をかけた。

「じゃあさっそく行きますか」
「そうだな！私としてはホントは正門を乗り越えていきた」
「女の子はそんなことするもんじゃありません！」

叫ぶように入れた僕のツッコミに、くづゆは非常に不満そうな顔をして正門を名残惜しげに眺める。
僕はくづゆがホントに正門を乗り越えようとする前に彼女の手を取って脇の小さな門から校庭に滑り込んだ。

いくら中学生のスカートが膝ぐらいだと言っても門を越えようとしたら中が見えるに決まっ……別に見たいわけじゃない！
僕も一応健全な男子であるから女の子に興味はある。が、わざわざスカートの中身を見たいとは思わないのだ。
大体ああいうものはチラリズムがいいのであって下から思い切り見えたら意味が無、……そこの君、僕は健全な男子だ、こういう思考は仕方ないと思ってくれたまえ。
高校に入ったらますますスカートの丈が短くなるんだろうな、と

思いかけた僕は、あとほぼ半年でその高校生なんだなぁ、と今更感じてしまった。
受験まで半年あるかないかだというのに、僕は何やってるんだろうか。
それもこれも隆久のせいだ！とげんなりした僕は、鞄を肩にかけてないほうの手がくい、と引かれたので立ち止まった。

「奏、昇降口はあっちだぞ」
「え？あ…ごめん、ぼーっとしてて」

あはは、と笑って見せればくづゆはまったく仕方のないやつだな、とまるで僕の姉か何かのように言って僕の手を引く。
その引かれる手を見ていた僕は、ふとあることに気づいて足取りが必要以上に硬くなった。

ちょ、これ手つないでる！？い、いやぁまさか……やっぱり繋いでる！間違いなく手ぇ繋いでるって僕！

女の子と手を繋ぐなんて一体いつ振りだろうか。確か小学校低学年の時が最後だったような、うん。
うわぁ青春してるなッ、僕っ、なんて誰にも聞こえないのに自分に茶化していってみるも、赤い顔はどうにもなりそうにない。
唯一の救いは、くづゆが振り返ったとしても暗くて僕の顔が良く見えないということぐらいだろうか。あぁ、あとくづゆがこういうことをあまり気にしないことも。
気にしないからこそこういう状況になるんだけど、まあそのことは気にしないことにした。

夜の学校というのはやっぱりなんかしろの恐怖を感じさせられる。
僕とくづゆは結局昇降口で手を離して（ちょっと、ちょっとだけ残念だった）、上履きの音をぺたぺた響かせながら生活室へ向かっていた。
たびたび廊下に浮かび上がる非常ベルの光がまた何とも言えない。
普通の女の子というのは、こういうものを比較的怖がるものなのだが僕の隣を歩くくづゆの足音は酷く軽快に響いていた。
顔は良く見えないけれどきっと楽しそうなんだろう。

「…楽しい？」
「楽しくないのか？」
「くづゆが楽しいなら楽しいよ」
「じゃあ奏もすごく楽しいんだな！」

どうやらすごく楽しいらしい。そして僕もすごく楽しいということになった。
確かに僕はくづゆが楽しそうにしているのを見るのは楽しいので、まったく持って語弊はないし問題もない。
とりあえず僕が幽霊とかお化けとかが滅茶苦茶駄目な人じゃなくてよかったなぁ、と思った。

「お、見えてきたな」

くづゆにとっては歩き慣れた校舎内らしく、懐中電灯もつけていない中で（どうやら着いてからでないと点けてはいけないらしい。

雰囲気の問題だ）生活室を眺めるように首を少し伸ばした。
残念ながら実質1年ほどしか通っていない上2年のブランクがある僕にはまったくもって分からない。
もう一度校舎を案内してもらった方がいいかもしれない。後日くづゆに頼もうとぼんやり考えた。

ぺたぺたと音を響かせて、僕とくづゆは生活室の扉の前に立つ。
月明かりもまだない教室の中は扉に嵌められたガラス越しに見ると真っ暗に近くで非常に不気味だ。
こうやって見れば、幽霊が出るといわれても何の違和感もないと思う。
しみじみ感じてしまった僕の隣で、くづゆが持ってきた鞄を漁りだした。

「鍵は借りてきてあるんだ。確かここに…」

引っ張り出したくづゆの手にはチェリー味のチュッパチャプスが。
くづゆはしばらくそれを無言で眺めてから凄まじい勢いでそれを戻した。

「いっ、今のは違うからな！」
「あーうん」
「気にするなよッ！」
「僕はコーラ味が好きだよ」
「気にするなというのにっ！」

見えないけれど多分赤い顔で怒鳴ったくづゆは、四苦八苦して鞄の中を漁ってからやっと見つけ出した鍵を間髪入れずに扉に差し込む。
鍵についているのか、小さく鈴の音が鳴った。

何も隠すことないのに、と思いながら僕はくづゆにバレないようにくすくす笑う。扉を開けたときに肩を叩かれたから、きっとバレたんだろう。

ずかずかと足音を立てて入っていくくづゆについていくと、再びごそごそと聞こえてからスイッチを入れる音がして光の棒が室内を照らした。

くづゆがつけた懐中電灯の明かりで、開けたままの鞄の中身が少しだけ見える。

ハバネロくんとビーノが見えたことは言わないでおこうと思った。あとチュッパチャプスの棒が異常なほど見えたことも。

「さて、まずは幽霊を呼び出さねば始まらんな！」

「でもどうやって？」

交霊術とかは出来ないよ、と冗談交じりに言って自分の懐中電灯をつけた瞬間、僕らの後ろで開けたままのはずだった扉が勢い良く閉まった。

喧しい音を立てて閉まった扉が黙ると、その場に落ちるのは静寂だけ。

……いきなりですか！

つづく。

夏だ！アレだ！会計だ！　２（後書き）

どうも、お久しぶりです。
夏終わってしまいましたが彼らにはまだ夏やってもらいます（笑

夏だ！アレだ！会計だ！　3

しん、とした教室の中で、僕らは扉を振り返った格好のまま固まっていた。

閉まった扉はぴくりとも動かないけれど、扉にはめ込まれているガラスの向こう側に誰もいないという事実がこの場の異常さを示している。

妙に張り詰めている雰囲気に、暑さとは違う理由から頬を汗が伝った。

ホラー系は別に苦手なほうではないはずだがこうやって実際に体験するのはまた別で、怖いものは怖い。

とりあえず落ち着くべきだろうと判断した僕はゆっくり目を閉じて深呼吸をしようとしたのだが、その瞬間に右手に触れてきた何かに驚いて逆に息を止めてしまった。

驚いて頼りなく跳ねた左手から懐中電灯が落ちて音を立てる。

パニックになりかけた頭はその音で冷静さを取り戻して、僕は触れてきたそれがくづゆの手だと気づいた。

「…くづゆ？」

「なんだ？」

怖いのか、と聞こうとしたが止める。多かれ少なかれ、くづゆだって恐怖は感じているに違いないからだ。いや、まぁ、もし思い切り楽しそうな顔で「楽しいぞ！」と言われたらちょっと対処に困るからでもあるのだが、そこは置いておく。

聞くのを止めた代わりに僕は手は握ったまま落としてしまった懐

中電灯を取るために調理テーブルの下に潜り込んだ。
そして、調理テーブルの下にいる青白い顔とばっちり目が合ってしまった。
「……」
心臓の音が五月蝿い。
「……」
「……」
向こうも何も喋らないし、僕は勿論何も言えないので双方が無言のまま時が過ぎる。
ものすごく怖い。皆さんも某呪いのビデオ映画の彼女のような顔を思い出してくれればどれだけ怖いかが理解できるだろう、とりあえず怖い。
怖いのだが、もし目を逸らした瞬間に何かとてもよろしくないことが起きたりしたら、という嫌過ぎる予感が胸を過ぎるのでまったく動けなかった。
あまりにも現実味がないこの状況の中で、繋いだままのくづゆの手の温度だけがやけにはっきり僕の脳に届く。
「……」
「……」
体感時間としては5分程経過したころだろうか、僕はそろそろや

ばいな、と感じていた。
理由としてはまったくもって単純で、目の前の青白い顔が徐々に近づいてきているからである。…恐ろしい。
恐ろしいがいつまでもこうしているわけにもいかない。僕自身が危ないというのもあるのだが、このまま顔が近づいてきて僕に何かあったら必然的にくづゆにも危害が及ぶということだからだ。

よし、あと5秒したら立ち上がってくづゆの手を引いてダッシュで逃げよう。

そう決意して、僕は心の中でカウントを始めた。

5、

4、

3、

2、

い、

「あああアァァァァあああああアアアァぁぁぁぁあぁァァァァぁぁぁ――――――――――――――ッッ！！」

「わぁぁぁぁあっぁあああっぁあぁぁぁ――――――――――――ッ！？」

最後のカウントをしようとした瞬間、目の前の顔がカッと目を見開いてこの世のものとは思えない（確かにこの世のものではないのだけれど）声を上げた。

その顔の恐ろしさに驚いたのと釣られたので僕も叫ぶ。

「奏ッ！？」

繋いだままの手が引っ張られるような感覚がして、僕は蹲っていた状態から尻餅をついてしまった。

そんな僕の隣に、くづゆが高く結った髪を揺らして膝をつく。こんな時だというのにくづゆのシャンプーの香りにちゃっかり反応してしまったのは心にしまっておくことにした。

くづゆは目の前に迫っている青白い顔を一瞥した後、僕と繋いでいない方の手を懐中電灯を持ったまま思い切り振りかぶった。

「え、」

呆然としている僕の視界をくづゆの白く細い腕が勢い良く横切っていく。

何がなんだか分からないまま、一秒もしない内にくづゆの拳が青白い顔面を捕らえていた。

鈍い撲殺音と呻き声が響いたのが聞こえたので、幽霊って殴れるんだなぁとぼんやり思っていると、短く息を吐いたくづゆが僕を引っ張り上げて（くづゆは、女の子です。念のため）先ほど閉まった扉まで駆けていく。

…これじゃ立場が逆な気がする。情けないな、さっき考えていた時には僕がくづゆの手を引いてるはずだったんだけど。

くづゆはたどり着いた扉に手をかけて引こうとするのだが、普段ならすんなりと開くはずの扉は鍵がかかってしまったかのようにびくともしなかった。

僕も一緒に引いてみるが状況に変化はない。

舌打ちしたくづゆは扉を開けるのを諦めたらしく、さっき殴った幽霊がいたテーブルを睨み付けた。

「すまん、少し浮かれていた」

「え、あ…平気だよ、怪我もないし」

本当に申し訳なさそうに言うくづゆに笑いかけて見せれば、目が慣れてきたのか僕に笑い返すくづゆの顔が生活室に入った時よりははっきりと見えた。

そしてその顔はすぐに引き締められてテーブルに向けられる。

僕も同じように顔を向けると光を感じてある程度暗さに慣れた目にゆらりと立ち上がる人のようなものが見えた。

写真撮りたいなぁ、なんて浮いたことを考えて恐怖を紛らわそうとしてみるが残念なことに上手くいかない。

こちらに向かってくるような素振りを見せた人影に、くづゆがキツい視線を向けたまま声が上げた。

「私の友達一号に手を出そうとは良い度胸だな」

ちなみに一号であり唯一の、である。しかし空気は読めるほうなので僕は口には出さなかった。くづゆに友達と言われるのは好きだし、心地良いからでもある。

立ち上がった黒い人影はこちらを見ているらしいが顔がまったくと言って良いほど見えなかった。

暗いから、という理由だけではなさそうだ。

さっき僕が見たときは暗い中でもはっきり見えていたのだから間違いない。

くづゆもそれを警戒しているのか、握られた手にくづゆの体温が強く食い込んだ。

黒い影はその場に突っ立ったままぴくりとも動かずにこちらを眺めている。

何も言わない上に何をしようとしない。だがそれが逆に恐ろしかった。

「……」

無言のまま、僕はくづゆの手を握り返す。きつく握り合っているそれは、さっき手を繋いだ時とはまるで意味が違っているように感じた。

「……っ」

「……」

緊張のせいか知らぬ間に息を止めてしまっていた僕は、それに気づいてからもしばらく息を止めておく。

なんというか、息が吐けるような雰囲気ではないのだ。…雰囲気ではない、のだが、吐いて吸わなければ死んでしまうので僕は緊張の中細く息を吐いた。

何か起こる気配はない。

が、息を吸った瞬間に今まで突っ立ったままだった黒い影が凄まじい勢いでこちらに走り出してきた。

「ッ！？　奏っ、！」

「くづゆ、ッ！？」

くづゆの手が庇うように僕を突き飛ばして、そのことで隙の出来たくづゆに黒い影が覆いかぶさるように襲い掛かる。
半分ほど黒い靄に覆われてしまったくづゆに焦った僕だったが、くづゆは肩にかけていた鞄をそいつに叩きつけると開いた右手で間髪入れずに顔（黒くて顔なのか肩なのか分からないが多分そこら辺）を殴りつけた。
叫び声と共に、そいつが一瞬だけ離れて、それからまた襲い掛かろうとする。
襲い掛かろうとはしたのだが、いきなり何かを見て動きを止めたかと思うと慌てて逃げ出そうとし始めた。

「…？」

くづゆに突き飛ばされたままの体勢だった僕は、黒い影が見たと思えるその場所を眺めて、それからもう一度黒い影を見つめた。
丁度くづゆがそいつに回し蹴りを食らわせているところだったのだが、そいつは明らかにくづゆの鞄を見て怯えている。
とある仮説を立てた僕は、半開きになったその鞄を引き寄せると黒い包装を掴み上げた。

「くづゆッ、ハバネロくん借りるよ！」
「何に使う気だっ？」
「とにかく必要なんだ！」

案の定、僕の言葉を聞いた黒い影はつんざくような甲高い声を上げて卍固めに入ろうとするくづゆ（何故プロレス技をかけようとするんだ）の腕から逃げようともがく。
くづゆは足を絡めようとしながら僕を見て、それから頷いた。

「奏がそういうなら」

「ありがとう！」

僕はハバネロくんの封を開けて中身を片手いっぱいに掴むと、くづゆに捕らえられてもがいている黒い影の口（おそらく）に真っ赤な菓子を叩き込んだ。

「アアあああぁぁ嗚呼ぁぁぁぁアアァァァァ――――――ッッ、ッ、！！」

耳を塞ぎたくなるほど高い声を上げて、黒い影がうねうねと形を失っていく。

くづゆの腕から霧散してふよふよと飛んでいった黒い塊は、隠れるようにして部屋の隅に逃げていくと、隅っこの方で蹲るような形を取った。

暗い部屋の中であまりにも目立たないその影に、僕は自分でやったこととは言えとんでもなく申し訳ないことをした気分になる。

ハバネロくん（辛いもの）が苦手だとは思ったのだが、まさかここまでになるとは思っていなかったのだ。

くづゆは卍固めが成功しなかったのが少し不満なのか、ほんの少しの間だけ口を尖らせていた。

僕は苦笑しながらハバネロくんのせいでひりひりしはじめた手を払う。

「くづゆの持ってきたお菓子のお陰で助かったよ、ありがとう」

「私のお陰で？」

「そう」

「…そうか」

にっこり笑って言えば、くづゆは満足そうな顔をして褒められた

小学生のように微笑んだ。
元が美人なのでそういう可愛いことをされると威力が倍増する。
僕は赤くなった頬を誤魔化すようにもう一度手を払った。
ひとしきりにこにこと笑ったくづゆが、部屋の隅に目線をやる。
黒い物体は未だ頼りなげに蠢いていて、気のせいか泣き声のようなものまで聞こえ始めた。

「それで、あれが隆久の言っていた幽霊か？」
「多分、そうじゃないかな」
「なるほど」

懐中電灯を持ったままの手を口元に当ててしばらく思案したくづゆは、よどみなくその影のところまで歩いていった。
黒い影は怯えたように高く震えてから、部屋の隅の2、3mを躊躇いがちに移動する。
くづゆの隣に歩いていった僕はその様子を見ながら弱いものいじめしてるみたいだ、なんて罪悪感を少し感じた。

「少し話を聞きたいんだが、構わないだろうか」
「くづゆ、これって喋れるの？」
「む？　喋れないのか？」
「うーん…喋ったって噂は聞いてないけど」

僕の言葉に、くづゆは困ったなという顔をして黒い動くものを見下ろす。
ハバネロくんと卍固めがよほど怖かったのか、黒いものはとうとう一番隅の方へ身を縮めた。
明らかに怯えられていると気づいたくづゆは小さくため息を吐いてから、黒い物体の前に膝をついた。

「すまない、危害を加えるつもりはなくてだな…その、話は出来るのか？」
「……」

黒いのは無言でうねうねと蠢いている。
くづゆはしばらくそれを見つめた後に、後ろにいる僕を見上げて眉を下げた。

「卍固めがいけなかったんだろうか。やっぱり日本海式原爆固めの方が適切だと」
「プロレスはよく分かんないけどとにかく技かけようとするのやめなさい」
「……じゃあメキシカンエースクラッ」
「やめなさい」
「…じゃあ何ならいいんだ！」
「どれも駄目に決まってんでしょうが！」

危うくくづゆの頭を叩きかけてしまったのだが、僕はすんでのところでそれをなんとか堪える。
危ない危ない。校門を乗り越えたがろうがプロレス技かけたかろうがくづゆは女の子なんだから叩くわけにはいかない。
僕のツッコミに、くづゆはむっと頬を膨らませてからくるりと黒い物体の方へ顔を向けなおした。

「さっきのことは悪いと思っている！だから話をしてくれないか？話せないなら筆談でもいいんだ」
「……」
「お前のことを傷つけるつもりじゃなかったんだ。最近、生活室で奇妙なことが起こると生徒が怖がっていたから調査しにきただけなんだ」

信じてくれ、と真剣な声で言ったくづゆの隣に僕も膝をつく。
こういうよく分からないものに真摯な態度を取れるところはくづゆの良いところだ。ちなみに過去のよく分からないものには「引きこもり」が含まれる。

「僕も、ごめん。辛いもの嫌いなんじゃないかと思ってたんだけど、そんなことになるとは思わなくて、…本当にごめん」
「……」

黒いものは僕らを見上げるようにして動いた後に、まるでスライムのようにのったりと僕らの方へ寄ってきた。
先ほどより近くなった距離で、黒いものは何かに迷うようにのたのたと僕とくづゆの前を横に往復する。
そうしてしばらく往復した後に、黒いものから綺麗なソプラノが響いた。

「私も、ごめんなさい。夜に生徒が来るなんて初めてで、びっくりしてパニックになっちゃったの」

そう言って黒いもの、…おそらく彼女、はのたのたと動いて部屋の隅に移動する。
僕はぽかん、と口を開けて呆然としていたのだが隣のくづゆが叫んだ声で驚いて覚醒した。

「あああぁぁぁぁ――――――――ッ！」
「どっ、どうしたのッ？」

くづゆはその場で頭を抱えるとうんうん唸り始める。心配になった僕はくづゆの肩に手を置いたのだが、その瞬間にくづゆはがばっ

と起き上がった。
その顔は今にも泣きそうに歪められていて、僕は色んな意味でびっくりする。

「ど、どうしよう奏ッ」
「な…何？」

「女の子に卍固めを仕掛けてしまった！」

「……」
「それに思い切り殴ってしまったし回し蹴りもしてしまった…ッ！
どうしよう！　女の子の身体は大事にしなさいと言われていたのに！」
「え、誰に」
「母に！」

そりゃまぁそうだろう。　しかし僕は一つ思うことがある。
くづゆは『他の』女の子を大事にしろという意味で捉えているようだが、それは八割方くづゆが無茶苦茶なことばかりするのを心配しての発言じゃないだろうか。
…間違ってないと思う。

はぁ、とため息を吐いた僕の前に、黒いものがのたのたと歩いてきて（歩く？）僕とくづゆを見上げた。

「大丈夫ですよ。私幽霊ですから」
「いや駄目だ！　私のポリシーに反する！」

あぁぁあぁあ、と喚きながら再び頭を抱え始めたくづゆに黒いものは困ったように首を傾げて、それからのたのたとテーブルの隅に

行ってしまう。
くづゆと一緒にそれを目で追っていくと、少しした後にひょこ、とそこから誰かが出てきた。

赤みがかった前髪は切ってないのか顔の上半分を覆っていて、ざんばらな髪が触れている肩を覆っているのはセーラー服だった。
身長は僕よりも少し小さいくらいだろうか。小柄で可愛らしい女の子だった。

「ほら、怪我してませんよ」

呆けた顔で突然現れた少女を見つめる僕らの前で、彼女は自分の身体が無事であることを示すように両手を広げて見せた。

……。

丸々1分ほどその光景を見つめた後に、くづゆが再度叫ぶ。

「こんな可愛い子を殴った拳句蹴り飛ばしてしまったあああぁぁぁぁぁぁあ――――――――ッ！！」
「えぇえっ――――っ？！」

何が駄目だったんでしょうっ、とわたわたする少女を安心させるようににっこりと笑って見せた僕の顔に、首をふるふると振っているくづゆのポニーテールがばしばし当たる。
よほど混乱してしまっているらしい。仕方がないので僕は顔に当たり続けるくづゆの尻尾を掴んで、くづゆの顔をこちらに向けさせた。
顔を覆っているくづゆの手の指の間から、涙に塗れた目が見える。

「や、やってしまった…こんな可愛い子を…」
「大丈夫、くづゆも可愛いから」

にっこり笑ってみると、くづゆは真っ赤な顔で固まった。よし、これでひと段落だ。
僕は固まったままのくづゆは放置して、少女に向き直る。少女は前髪を気にするような素振りを見せながらその場に申し訳なさそうに立っていた。
思えば僕はこんないたいけな少女にハバネロくんを引っつかんで食わせたわけであるが、そこは考えないようにする。

「君が生活室の幽霊ってことで間違いはないね？」
「…はい」
「どうしてこんなことをしたの？」

なるべく優しく聞こえるように努めたつもりだが、少女はびくりと肩を揺らしてから縮こまって黙ってしまった。
何も言う気配が無くなってしまった少女から目をそらしながら、僕は何かまずいことを言ってしまっただろうかと一人焦る。
こういう行動に出られると、とんでもなく焦るのだ。
何か一つ失敗したと思うだけで結構な量の汗をかいてしまったりする。
僕は自分でフリーズさせておきながら、くづゆに助けてもらいたいと強く思った。

「…あの、」
「うぇっ、え？」

突然声をかけられたので変な声が出てしまった。恥ずかしい。
急いで少女へ視線を向けなおすと、少女はその小さな肩をなおさ

ら小さく縮めて、か細く呟いた。
「私を、助けてはいただけないでしょうか」
「……助ける？」
聞き返した僕に、少女は赤みがかった前髪を揺らして頷く。
助けるとはどういうことだろうか。そもそも何から助けろというのか。助ける方法は？
などと色々考えてしまった僕の隣で、フリーズしていたはずのくづゆが勢い良く髪を揺らして少女の手を取った。
「勿論構わないぞ！　私は生徒会長だからな！」
「あ、ありがとうございますっ」
「ちょっ、くづゆ！？」
「何だ、奏」
「なんだ、って…助けちゃうの！？」
「悪いのか？」
「悪い…わけじゃないけど、元々頼まれたのは生活部の人たちを助けるってことでしょ？両立出来るもんなの？」
僕が聞くと、何故駄目なのか分かっていないという顔で首を傾げていたくづゆは沈黙した後に右斜め下に視線を泳がせた。
察するに忘れていたらしい。僕はため息を吐きたくなるのを堪えて、とりあえず額に手を当てた。
その場に流れる妙な沈黙。それを破ったのは、問題の中心である少女だった。
「多分、出来ると思いますよ」
「え？」

「ホントか！？」

驚く僕と、食いつくくづゆの前で、少女が頷く。

「だって、私の願いはこの生活室から逃げ出すことなんですから」

少女の言葉に、僕とくづゆは同時に首を傾げることとなったのだった。

つづく。

夏だ！アレだ！会計だ！　4

「生活室から逃げ出す」。

その言葉の意味がまるで分からないまま、もう遅いからと少女に帰されてしまった僕らは、数日後に再び生活室を訪れていた。

真昼間から心霊スポット（？）に行くのが不満だったのか、くづゆはずっと小さくぶつぶつ言っていた。いや、もしかしたら後ろについてきている男のことが単に気に食わないだけかもしれない。

鍵を預けられた僕が扉を開けるその後ろで、迷惑極まりない俺様野郎、間宮隆久が隣のくづゆにちょっかいを出す。

「くぢゅーこないだポニテだったんだって？俺も見たかったわー」

「私の名前はくづゆだっ！いい加減学べこの女たらし！」

「学んでる学んでる、学んでるけどわざと言ってんだなこれが。てか俺は女たらしじゃなくて、女が寄ってくるだけなんだわ」

けらけらと笑う隆久にくづゆがむっとするのが、背中越しでも充分に伝わった。

とりあえず僕は僕に出来ることをやっておこうと、鍵を回して扉を開ける。妙にしんとした生活室は、数日前にあんなことがあったが嘘のようだった。

先日の乱闘を思い出して少しため息を吐いてしまった僕の手から、小さな鍵が取り上げられる。

後ろを向けば、隆久がにっこりと笑っていた。正直キモい。

「んじゃこれは先生に預けとけ」
「…あんたホントに教師だっけ」
「多野、お前なんだかんだで俺に酷いよなあ」

隆久君ショックー、とやけに芝居がかった動きで嘆いた隆久を、くづゆが「キモい」と切り捨てる。くづゆ、そういうのは思っても言っちゃいけないんだよ。
アホは放っておくことにしたのか、くづゆが僕の隣に並んで生活室を見回した。

「…そういえば、名前も聞いてなかったな」

ぽつりと呟かれた言葉に一瞬考え込んでしまってから、あの子のことか、と納得する。
確かに名前を聞く暇もなかった。ほとんど何もわからない状態のまま学校を出て、なんとなくぼんやりしたまま帰路についた気がする。
考えてみれば、名前を聞かなかったというのは大きなミスだったと思う。名前を知らなきゃ呼びたくても呼べやしない。
日陰になっているせいか教室よりも暗い雰囲気の生活室を見回しながら考え込んでいた僕の後ろで、能天気な声が響いた。

「いんじゃねえの、ハバネロちゃんで」
「……」

嫌な沈黙がその場に落ちた。

くづゆはとてもじゃないが女の子として見せられないような顔をしていて、僕はそれを見なかったことにする。

かくいう僕も理解できない思考回路を持つ後ろの男に口元が変な笑みを浮かべて引きつっていたのでお相子だろう。
おそらくこの間僕が彼女の口にハバネロを入れたという話からつけたのだろうが（聞いてるとき笑い死ぬんじゃないかと思うほど笑っていた。そのまま死ねばよかったのに）、会ってもいない女子に嫌いなものの名前をつけるってどういう趣味だ。
ため息を吐きたくなった僕だったが隣のくづゆが酷い顔で殴りかかる準備をし始めていたので仕方なく乱闘が起こる前に隆久に話しかけることにした。
ハバネロちゃーん、とさっそくあだ名を活用し始めている国語教師に顔を向ける。

「先生」
「あん？」

何かを探すように片手を目の上辺りで横にしている隆久が視界に入った。本当にそれであの子が出てくると思っているんだろうか。思っているとしたらこいつは僕が思う以上の馬鹿なのかもしれない、と少し考えてしまった。
とりあえず気持ちを落ち着けるために小さく息を吸ってから、出来るだけ長く吐き出して、問いかける。

「先生の嫌いなものって何ですかね」
「んー、めかぶかな」

これまた微妙なチョイスをしくさりおって。

「じゃあ今日からあんたは『めかぶくん』です。って言われたらどうよ」

げんなりしつつも出来るだけ努めて平静に言ってみれば、隆久は一瞬目を見開いた後にぷるぷると小刻みに震えながら銀色の調理台に手を乗せて蹲った。
数十秒ほどそのままの姿勢で固まっているので、気になって覗き込んでみる。

真っ青だった。

「やべえ……超嫌だ……！」

思った以上の効果を発揮したらしい。そんなに嫌いなのかめかぶ。そもそもめかぶってどういう食べ物だったっけ。
ぼんやりとめかぶを思い浮かべようとし始めた僕の視界に、長い黒髪が映る。

「人の嫌がることをするなんて教師として最悪だぞ！ましてやあんな可愛い子にそんな酷い名前をつけるなど言語道断！」

やはり我慢ならなかったのかびしっと綺麗な人差し指で隆久を指差したくづゆだったが、今まで震えていた隆久は蹲ったままくづゆに顔を向けると、3拍おいてから口を開いた。

「え、可愛い子？マジで？」
「大マジだ！華奢でちっちゃくて可愛いぞ！」

今までめかぶの絶望と恐怖に震えていた（で、めかぶってどんなんだっけ）隆久の瞳に一筋の希望の光が差し込んだ。
どうやらくづゆは言葉の選び方を間違えてしまったらしい。
蹲ったままの身体を若干期待で前後に揺らしながら、隆久がこちらを見上げる。

「どんぐらい可愛いわけ？」
「えーと…」
「声が可愛いぞ！たまらんぞ！」
「……だ、そうです」

僕に問いかけたようだったが答えるより先にくづゆが叫んだのでそれに続くように言葉を発した。
それにしても、同じ女の子のことを話すのにこれだけ興奮するって、女の子としてちょっとどうなんだろうか。まあ……くづゆだから許せる気がしてきた。
多分同じことを隆久がしたら、僕はきっとこいつを殴るだろう。たとえ避けられたとしても殴るだろう、うん。
僕らの言葉を聞いた隆久は、へえ、と分かる程度にうきうきした声を漏らすと、ゆっくり立ち上がった。

「くぢゅーは大体俺と好みが一緒だからな、当てになる」
「だからっ、私の名前はくぢゅーではないっ！」

差したままの人差し指を上下に振って激昂するくづゆだったが、大抵人の話を聞かないこの男はやっぱり話も聞かずに再びハバネロちゃーん、と呼びかけ始めた。
先ほどより声に柔らかさが加わった気がするが（この女好きめ！）自分の嫌いな食べ物の名前で呼ばれて出てくる人間はかなり少ないんじゃないだろうか。現に僕だって「いんげんくん」なんて呼ばれたら背筋にぞぞっとしたものが走る。
まあ僕の好き嫌いは置いておいて、隣で指差した状態のまま若干涙目で何かを呟いているくづゆを慰めることにした。
固まったままの肩にぽんと手を乗せて、声をかける。

「大丈夫だよ、僕はくづゆの名前わかってるから」
「……うむ、……だがな、私はな、あの馬鹿野郎にくぢゅーなどという怪しい名前で呼ばれるのがどうにも耐え切れなくてなっ…！」
「うんうん、分かるよ。でもね、くづゆ。くづゆの嫌いなものって何かな」
「む？……そうだな、サラダ菜だな」

これまた二人そろって微妙なチョイスだな。やっぱり似ているところがあるのかもしれない。
少し潤んだ瞳でこちらを見てくるくづゆの肩に置いた手でもう一度ぽん、と軽く叩いてから僕は言ってみた。この後のリアクションも似てたらどうしようと思いつつ。

「じゃあ今日から君は「サラダ菜ちゃん」だ。って言われたらどうする？」
「……」

くづゆは一瞬びくっと跳ねるとその青みかがった瞳をふるふると震わせて青ざめ始めた。その変化に少しビビりながらそれを見守る。
そんなに嫌なものだろうか、サラダ菜って。むしろサラダ菜って日常の料理で出てくることがあるだろうか。多分そんなにないはずである。めかぶもまた然り。やっぱり変なところが似ているなあこの二人は。
本格的に泣きそうになり始めたところで、僕は苦笑に近い笑みを浮かべて彼女の頭を撫でてやった。

「サラダ菜ちゃんとくぢゅーだったらくぢゅーの方が可愛いと思わない？」
「……思わないこともないこともないぞ」

いやいやどっちだよ、とツッコミを入れかけた僕の声が響くより先に、綺麗なソプラノが隣から聞こえてきた。

「私は可愛いと思いますよ、くぢゅーちゃん」

片手を胸の前に置いて、唯一髪で隠れていない口元に微笑を浮かべるセーラー服の少女が、そこに立っていた。

突然の登場に呆然とする僕らのすぐ後ろで、「おお、Bか、でも行けるな」などと阿呆なことを言う変態教師の声が響く。何のことか一瞬分からなかった僕はしばらく考えて思い当たったそれに気まずくなって少女の足元に視線を下げた。なんてことを言うんだこいつは。

赤髪の少女に触れようとする隆久の手を、くづゆの白い手が躊躇うことなく叩き落す。ぺちん、と乾いた音が耳に届いた。

その光景をまた楽しそうに眺めていた少女は、小さく声を上げるとその小柄な体を少し折り曲げて頭を下げた。

「ごめんなさい、自己紹介もしないで追い出すようなことをしてしまって…」

「構わないぞ。そんなもの今からすればいいからな」

自信満々に言い放ったくづゆは、傍にあった椅子を何個か持ってくるとその場に並べ始めた。

きょとんとした顔で（といっても前髪で顔が見えないのだが）それを見つめる少女ににっこりと笑いかけて、くづゆが丸椅子を手で示す。

一応四つ用意していたけれど、足の曲がった椅子を隆久に追いやったのは見なかったことにした。そして隆久がそれをくづゆの椅子と入れ替えたのも見なかったことにした。

なんだかんだで一枚上手なところがムカつくのである。

「座ってくれ。まずは自己紹介をしよう、話をするのはそれからだ」
「あ、はい」

促されるまま椅子に座った彼女は、くっつけた膝の上にちょこんと手を乗せた。可愛らしいしぐさに、女の子だなあと実感する。
同じように椅子に座った僕とくづゆだったが、こっちの女の子は残念ながら椅子が歪んでいることに気づいた瞬間まるで百獣の王のような眼光で隆久を睨み付けた。別に僕に向けられたわけではないのだが何故か背筋が伸びる。そうか、殺気ってこれのことか。
対した隆久はその凄まじい殺気をゆるりと受け流して悠々と丸椅子に座った。そのまま余裕の表情で左手をひらひらと振りながら、少女の方を向くように促す。
くづゆはしばらく隆久を睨んでから、心底忌々しそうに「チッ、してやられた」と低い声で呟いた。そしてそれを見ていた僕に気がつくと真っ赤な顔でわたわたと両手を振り始めた。

「ちっ、違うぞ何も言ってないぞ！」
「あー、うん。分かってるよ」

にっこりと笑ってみたが、くづゆは涙目で「嘘くさいぞ！」と叫んだ。おかしいな、精一杯がんばってみたんだけど。
今度は苦笑いをした僕に拗ねた子供のような顔をしていたくづゆは、彼女を放置していたことに気づくとすぐに顔を引き締めた。
手のひらを胸元に当てながら、凛とした声で口を開く。

「まずは私から自己紹介しよう。風鈴中学3年、生徒会長の八城くづゆだ」
「はい、くぢゅーちゃんですね」
「くぢゅっ…！くぢゅーではなくてっ、いやでも女の子に怒鳴るな

んて、うむっ、しかし私はくぢゅーでは…っ」

この間と同じように頭を抱えて唸り始めるくづゆに、少女は優しく微笑んだ。少し首を傾けて、揺れた前髪の間から柔らかい視線と共に薄い緑の瞳がちらりと覗く。

外国の人なのだろうか、不思議な色をしたその瞳を再度確かめようとした時には、彼女の手が前髪を直してしまっていた。

他の2人に聞いてみたいと思っても、頭を抱えるくづゆと、そのくづゆを弄っている隆久は見ていないだろう。

ほんの少しもやもやした気分になった僕がもう一度彼女に視線を向けたのと同時に、彼女はくづゆに笑いかけた。

「私は、くぢゅーちゃんって呼びたいです」

「どうもこんにちは、生徒会長の八城くぢゅーです」

きりっとした真顔で言い切ったくづゆだったが、言ってる言葉は阿呆以外の何者でもなかった。僕の手がツッコミを入れたそうに小刻みに震える。しかしちょっと待て僕。お前はただのツッコミ要員になりかけていないか？いやそんな馬鹿な、僕は別にツッコミが好きなわけでもないしツッコミになりたいわけでもない！この場にボケしかいないのが問題なのである！

〇魂のぱっつぁんの気持ちが分かりかけている僕だったが、とにかく今は自己紹介をしておいたほうがいいだろうと判断した。

「えーと、くづゆ」

「違うぞ！私の名前はくぢゅーだ！」

「いやいやいやいや名前変わってんだろお前えっ！」

「おお、やっとツッコミ入れたな多野。待ってたぜ多野」

「僕はツッコミ要員じゃねえええええ――――ッ！」

ばしんっ。
怒鳴った後にすぐ後ろの隆久がやる気のない拍手を贈ってきたので僕はそのままのいきおいでそいつを殴ってみた。殴られた隆久が、爽やかさを狙った笑顔で「グッジョブ！」と親指を突き出してくる。心なしかくづゆの目が期待で輝いている気がした。
ああ、お母さん。貴方の息子は引きこもりから脱出してすぐツッコミ要員になりそうですごめんなさいマジで。
もういやだ、と深いため息を吐いた僕の耳に楽しそうな笑い声が聞こえてきた。誰だよ笑ってる奴、といささかじっとりとした目を向けてみると、そこには少女がいた。
口元に手を当てて、楽しそうに笑っていた。女の子らしい控えめな笑い声に、ツッコミと化していた僕の心が少し落ち着く。

「楽しい？」
「はい、とっても」

優しく問えば、少女は嬉しそうに笑った。僕も同じように嬉しくなって、そっか、と笑いながら返す。
ぎゃあぎゃあと隣で喚いていたご近所コンビ（おお、この呼び方結構良い）も、少女の笑みに気づいて、やはり嬉しそうに柔らかく微笑んだ。
落ち着いたところで、自己紹介を再開する。ゆっくりと深呼吸してから、口を開いた。

「えっと、僕は多野奏。一応、生徒会副会長…かな」
「一応じゃないぞ、奏は間違いなく生徒会副会長だ！」
「うん、ありがと」

気持ちを込めて微笑んだ僕に、くづゆは一瞬固まってから少し慌てたように微笑み返した。今日は随分と落ち着きがない気がする。

女の子だとか、隆久だとかでちょっと気分が高揚してるのかもしれない。
そんな僕らをにやつきながら見ていた隆久は、僕らの間に割り込むと、にやついた顔のまま自己紹介をした。

「国語科教師、間宮隆久だ。よろしくハバネロちゃん」
「こらやめろめかぶくん！」
「お前もやめろサラダ菜ちゃん」

苦笑する僕の前でお互いの攻撃によって身悶えし始めたご近所コンビを見つめながら、いや、正確には隆久を見つめながら、少女がきょとんとした顔で口を開いた。赤い髪がふわりと揺れる。

「え、隆久くん？もしかして、間宮賛歌の？」

その言葉に身悶えていた隆久が、ばっと顔を上げた。くづゆも動きを止めて視線を上げた。
今まで見たことがないほど間の抜けた顔で少女を見つめる隆久に、僕とくづゆは同時に首を傾げる。

「間宮賛歌？」
「間宮賛歌って…何？」

聞いたこともないし、はっきり言ってあまり聞きたくない名のそれを口にした少女に問いかけると、彼女は手で前髪を直してから呟いた。
正確に言えば、その綺麗なソプラノを駆使して、ゆっくりと歌い始めた。

「間宮のまーは、悪魔のまー、間宮のまーは、魔王のまー、死にた

くなければ近寄るなー、あいつは銃でも殺せないー、あー、間宮は大魔王ー」

「……」

「……」

声は綺麗だし音階も決して変なものではないのだけど、ただ唯一、その歌詞が壊滅的におかしかった。どのくらい壊滅的かと言えば、聞いた僕らの思考を一瞬止めるくらいには壊滅的だった。

その壊滅的な歌を軽やかに歌い終えた少女は、何度か咳払いをしてから楽しそうに呟く。

「2番もあるんですよ、これ」

歌いましょうか、と微笑む彼女に僕らが首を振るよりも先に隆久が「いやもういいです」と掠れた声で口にした。

僕とくづゆの視線を受けた隆久は、しばらく目をそらし続けた後に深いため息を吐いて肩を落とす。よく分からない空気の中で、少女だけが楽しそうにしていた。

話せ話せ、と口よりも雄弁に語る僕らの瞳を見ないように瞼を閉じてから、眉間を指で押した。その指が、ゆっくりと少女に向かう。

「あんた、俺より年上だろ」

沈黙の後に吐かれた爆弾発言に、僕の頭からは一瞬昨日の補修で覚えた英文法が半分ほど吹き飛んだ。幸いにもゴム紐でもついているのか2秒後には戻ってきたのだが、それでもかなりの驚きである。

隣のくづゆも同じらしく、口を開閉しながら少女と隆久を交互に眺めている。瞬きの量がいつもの2倍だ。

僕らの視線を受けた少女は何かを眺めるように首を傾けてから、

唇に綺麗な弧の字を描いた。

「隆久くんの家庭科のテストの点数も知ってますよ」

にっこり。その言葉がぴったりと当てはまる笑い方をした少女に、隆久は「やっぱりなあ…」と両手に顔を埋めた。その指の間から、聞いたこともないほど低いため息が聞こえる。

隆久でもため息とかつくんだなあ、と思ってしまってからいくらなんでも失礼かと思いなおしてみる僕だったが、くづゆを見てみれば同じようなことを考えている顔だった。

にこにこと微笑み続ける少女が、更に言葉を紡ぐ。

「隆久くんは家庭科が上手でしたよね。裁縫も料理もすごく上手で、女の子だったら良いお嫁さんになれたのにって皆言ってましたよ。てっきり私、お料理関係のお仕事につくんだと思ってました。あ、でも響くんがここの先生になりたいって言ってたからそれでなんですか？それとも、」

「ちょ、待った、そこで終わりにして、死にそう」

「はい、いいですよ」

要求通り話すことを終わりにした少女から隆久へと目をやると、俯いて指に覆われた顔は確かに赤かった。

…うおお、なんだか見てはいけないものを見てしまった気分。

そわそわと姿勢を戻した僕の隣で、くづゆが興味津々に少女へと声をかける。

「響は先生になりたかったのか？」

「ええ、そうみたいですよ。社会科の先生に憧れてて、家庭科の時間に歴史の話をしては隆久くんにフライパンで叩かれてました」

その光景を思い出したのかくすくすと笑い始める少女に、隆久が顔を上げた。昔を知られるのが恥ずかしいのか、まだ微かに頬が赤い。
あー、と死にそうなひき蛙のような声で息を吐いた後、一つ手を叩いた。
「はいはい、その話はもう止めろ。用事があってきたんだろーが」
「隆久は響が先生になったから先生になったんだな。響が大好きなんだな」
「くぢゅーは想像力が豊かですねー、でも外れてらあそれ」
ひらひらと手を振ってどうでもよさそうに装う隆久に、くづゆが椅子ごと詰め寄る。丸椅子の足が床を引っかいた。
あくまで余裕の顔を作る隆久を無言で見つめつつ、僕は生活室の扉の前で緊張した面持ちで立ちつくす響くんこと宮崎先生の存在を隆久に教えるべきか教えないべきか少し思案した。
ちら、と少女に目をやれば、彼女は唇に人差し指を当てた。意味を理解した僕は、ゆっくりと、しかし深く頷いた。
力強く輝いたくづゆの瞳が真っ直ぐ隆久を捕える。
「嘘をつくな！見たことあるぞ、昔お前が料理の専門学校のパンフレットを持っていたのを！」
「待て、よく考えろ。それは本当にパンフレットだったか？お前の記憶は正しかったか？多分そのころお前小学生くらいだろ、記憶なんて曖昧なもんだぜ」
「間違いない！私は自分の記憶力に自信を持っている！観念しろ！お前は響くんが先生になるから先生になろうと思ったんだろうそうだろう！」
「人間の記憶なんて思いこみだけで作られてるんだ、記憶力なんて当てになんねえぞ。大体お前、学校で先生を響くんとか呼んでんじ

ゃねえよ」
「仮に私の思い込みだったとしても、お前のような人間が教師を目指すのは不自然だ！それに話を逸らそうとするな！見え見えだぞ！」
意地の張り合いのような力説の応酬の中、少しやかましい音が立ってしまう扉の音も目立たせずに宮崎先生がそろそろと横に扉を引いて行った。
どうやら書類か何かを届けに来たらしく小脇にファイルを抱えた宮崎先生は、ちらちらと目線をやる僕らに人差し指を立てて静かに、と合図を送ると隆久の後ろに立った。
論戦を繰り広げている2人はまるで気づく様子がない。
緊張の一瞬。
僕と少女が固唾を飲んで見守る中、ゆっくりと、宮崎先生の手が、隆久の眼を覆った。

「だーれだっ」

冷たい沈黙。
ああ、やっぱり隆久の親友ってだけはあるくらいのぶっ飛び具合だ。流石過ぎる。この状況で「だーれだっ」を出来る度胸とセンスは僕にない。
少女は僕の隣で肩を震わせて笑っていた。僕も半分ほど笑いたい気分だったがそれをするには少し頭が追いつけていなかった。
沈黙の中でにこにこと微笑む宮崎先生と、目隠しをされたまま固まる隆久と、それを呆けた顔で見守るくづゆ。
混沌と書いてカオスと読むとはまさにこのことなんだなあ、としみじみと実感してしまった。さて、実感したはいいがこれからどうしたものか。
困ってしまった僕の前で、隆久の口から呪詛のようなため息が零れ出た。長く重いため息の後に、隆久の手が目を覆っている宮崎先

生の手をがしっと掴んだ。
そしてそのままその手を引き剥がすとぐるりと体を反転して空いている方の手で思い切り宮崎先生の顔面を張り手で打った。
先ほどくづゆが隆久の手を叩いた時の１０倍近い音が響く。

「あいって――――――――――ッ！」
「ははっ、誰にだい宮崎くん」

かつて見たことがないほど爽やかに笑いつつ使い古されたギャグ（？）をかました隆久は躊躇うことなく第二波を放った。目を覆っていた手を掴まれているせいでまったく防御が出来ない宮崎先生はそれをモロに受けてとてもじゃないが聞いていられない声を上げる。
それでも構うことなく隆久はにこやかな嘘くさい笑みのまま何度か張り手を食らわせた。相撲の稽古場かと思うほど軽快に、張り手の音が響いて行く。
宮崎先生がぐったりし始めたところで、ようやく隆久は手を離して叩くのを止めた。同時に顔からは笑みが消える。

「ったく、この馬鹿」
「……うう……、痛い……」

呆れたようなため息を吐きながら手を払った隆久の後ろで、宮崎先生が真っ赤に腫れてしまった顔をファイルに押し付けて何とか冷やそうともがいていた。
よほど痛かったのか宮崎先生の目には涙が浮かんでいて、心配したくづゆが声をかける。

「大丈夫か？」
「だいじょばない…」
「うわー、宮崎くん日本人と思えねえー、だいじょばないとか日本

語じゃねえよむしろ人の言葉じゃねえよ」

すかさず攻撃した隆久に、くづゆがまさに小学生男子を見るような目を向けた。それ以外に形容できそうにない。

いつも以上に意地が悪い、というか人の上げ足を取り始める隆久から隣の少女へと視線を移して、話しかける。

「ていうか宮崎先生とあいつってここの卒業生だったん……ですね」

年上だと分かってしまった以上、敬語を使うべきだろうかと躊躇って使ってみた僕に、少女は軽く笑った。

「敬語じゃなくていいですよ。隆久くんは本当に目立つしモテる人でしたよ。響くんも陰でひっそりモテてました」

「へえ、なんか宮崎先生らしい…ね？」

「はい」

ちょっと落ち着かない僕に気付いたのか、少女はくすくすと楽しそうに笑って頷いた。視界の端ではご近所コンビと宮崎先生（むしろ3人まとめてご近所トリオじゃないか？）がぎゃあぎゃあと騒いでいる。

先日にあんな恐怖体験をしたとは思えないほどアットホームな雰囲気になってしまっている生活室。もしかしたら、いや、もしかしなくてもあのご近所コンビはここに来た目的を忘れているだろう。

あやうく僕も忘れてしまうところだったが、僕らはこの少女を生活室から追い出すもとい助け出すためにここに来たのである。親睦を深めるために来た覚えはない。いや確かに親睦が深まるのはいいことだけれど、それが目的ではなかったはずだ。

僕は若干痛み始めた頭を指先でぐりぐりと押してから、隣の少女へ声をかけた。

「あの、さ」
「はい？」

返ってきた声は無邪気そのもの。きっと彼女は、僕らに言ったことを忘れているわけではないのだろうけど、このままご近所トリオが騒いでいるのを見るのも楽しいと思っているに違いない。この予想には少し自信があった。
短く息を吐いてから、前髪に隠れた目を見つめるように彼女に真っ直ぐ目を向ける。

「生活室から逃げ出したい、っていうのはどういうこと？」

今までぎゃいぎゃいと騒ぎ声が響いていたはずなのだが、僕の声は妙にはっきりとその場に響いた。
動きを止めたくづゆ達からは「そういえば……」とでも言いたげな空気が流れてくる。ああ、やっぱり忘れていたようだ。まったく、くづゆはともかく隆久は良い大人なんだから……言っても無駄な気がしてきたのでここでやめにする。
前髪の奥でぴったりと僕に目線を合わせた少女が、柔らかな吐息を零して、背筋を伸ばす。

「そうですね……それを話すにはまず、私がどうしてここにいるのかを話す必要があります」

そういって、彼女は思い出に浸るようにそっとその瞳を窓の外へと向けた。

つづく

夏だ！アレだ！会計だ！　４（後書き）

少女の名前は次辺りに出る予定。

夏だ！アレだ！会計だ！　5

まだ、私が生きていた頃の話です。

その頃の私には友人らしい友人が周りにいませんでしたが、たった一人だけ、とても大切な親友がいました。

可愛くて優しくて、本当に思いやりのある子で、私には勿体無いくらいの子でした。

そして、私がここにいることになった理由、というのが、その女の子なんです。

そう言って笑った少女の顔は、前髪に隠れてよく見えなかったのになんだか辛そうに見えた。

リノリウムの床をぺたぺたと音を立てて上履きが歩む。
真っ赤な夕日が沈み終える時刻、廊下はもうほどんど紺色に染まっていて少女が床に落とす影とさほど代わりがなくなっていた。
躊躇いがちに辺りを見回す少女の視界で、意図的に伸ばしている赤髪が揺れる。
文化祭も近いこの時期、こんな時間になっても残っている生徒も珍しくはないが、ほとんどのクラスは教師の意向によって帰宅させられていた。
寄って、その中でも暗い廊下の中でぼんやりと浮かび上がる教室の明かりは、クラス設定をされていない教室から漏れ出ていた。
そして、少女の目的はその教室にあった。

「……」

まだざわついているその教室の手前まで足を進めて、少女は立ち止まる。
前髪の奥の薄緑の瞳が困ったように揺れていた。
教室の入り口からそっと覗けば、数人の演劇部員がまだ忙しなく小道具大道具を作成し、整備している。一秒も無駄に出来ないと言いたげに動いている少女や少年に、教室の外から眺めている赤髪の少女は声をかけるタイミングを掴めない様だった。
扉の端に手を置いて、無言のまま中を眺めている。

「……あれ、智奈(ちな)？」

するとその時、段ボール箱を抱えた二つ結びの少女が明るい声をこちらに向けた。

びくりと肩を跳ねさせて、智奈と呼ばれた少女が顔を上げる。前髪越しに目が合った二つ結びの少女はにっこりと歯を見せて笑った。

どん、と重そうなダンボールを脇において入り口まで駆けてきた少女に、智奈はやっと緊張の解けた顔をした。

「どうしたの？」

「あ、伶（れい）ちゃん、…あのね、今日、終わったら一緒に帰らない……かなあ、って」

思って、と小さく呟いた智奈は伶の背中越しに見える演劇部員の物珍しいものを見るような目に気付いて萎縮した。

赤髪で碧眼、その上ハーフ故の少し目立つ苗字。目立つことは目立つけれど二百人もいる学年ではあまり見ることも出来ないのだから近くにいれば見たくなるのは分かる。

分かるけどもあまり見ないでほしいというこちらの気持ちも分かって欲しいものだ。

居心地が悪い思いになりながら肩を縮めた智奈を見て、伶が微笑みながら頷く。

「いいよ、一緒に帰ろ。ちょっと時間かかっちゃうからそこ座っててよ」

「え、あ……うん」

そこ、と差された教室の後ろに置いてある椅子を見て、智奈がほんの少しだけ頬を引きつらせた。

ここにいても目立つのにあんな所にいたらどうなるか。想像しただけで嫌になってくる。
そんな智奈の気持ちを察したのか、段ボールを持ち直してきた伶が苦笑しながら囁いてきた。

「大丈夫、皆悪い奴じゃないから。それに智奈のこと嫌ってるわけないし」

ウインク付きで、安心させるように肩を叩いてくれた伶に、智奈がそっと息を吐いて微笑み返す。
まるでお姉さんのような友人の言葉はいつも人目を気にしてしまう智奈にとって一番の安定剤で、力づけられるのだ。
一旦落ち着いた智奈は、それでもなるべく部員と目が合わないように床に視線を落として椅子まで歩いていった。
背もたれに背を預けて、指を組んで膝に乗せた手を一心に見つめる。
時折ちらりと目を上げて伶の姿を確認してはすぐに目を落とす。
そわそわと身体を動かしては瞬きと共にそっと息を吐いていた智奈は、再び顔を上げた瞬間部員と目が合って身体を強ばらせた。

「……え、あう…」
「あ……」

目が合ってしまった部員も動きを止めてしまって、逸らすに逸らせない二人はしばし見詰め合うことになる。
前髪越しとはいえ、こんなに人と目を合わせた覚えがない智奈は充分に緊張して、握り締めた手にはうっすらと汗が滲んでいた。
瞬きすら忘れて目の前の同学年を見つめていた智奈に、見つめ返していた少女は躊躇いがちだが柔らかく微笑んだ。

「あの、そこの画鋲入れ取ってもらって良い？」
「えと…あ、はい」
我に返った智奈はきょろきょろと辺りを見回してから、小さなプラスチックの箱を見つけてそれを手に取った。
揺れる前髪を気にして忙しなく手で直しながら、透明な小箱を差し出す。
「ありがとう、グノーシスさん」
「う、ううん……」
にっこりと笑った少女に俯きながら声を返して、智奈は再び膝の上で手を握り締めた。
箱を受け取って離れていった少女をちらりと見てみると、友人らしき部員の耳元に何か囁いているのが見えた。なんとなく、落ち着かなくなる。
別に自分のことを言っているとは限らないはずだけれど、自分と接触してすぐにああいうこととしているのを見てしまうと不安になってしまうのだ。
もしかしたら自分のことを話しているのではないか。最悪の場合、陰口を叩かれているのではないか。
自意識過剰といえばそれまでだが、今までにそういうことをされる回数が度を越えていた智奈としては、いつもいつも不安でしょうがない。
目立つ目の色を隠すための前髪も、違う意味で目立ってしまっているようだし、だからと言って切ってしまえばそれで目立ってしまうだろうし。
表立って攻撃してくるような人間はほとんどいないのだが、『ほとんど』から零れ出ている人間が恐ろしいのだ。
冷たい視線とわざと声高に紡がれる悪意に満ちた言葉が一瞬智奈

の頭に浮かんで、彼女は首を振ることでそれを出来るだけ打ち消そうとした。
知らず、膝に乗せた手に力が篭る。こんなんじゃ駄目だ、と溜め息を吐いた瞬間、明るい声が上から降ってきた。

「智奈、帰ろ」

声に引かれて顔を上げた智奈に、伶が幸せを体現したような顔で笑う。
智奈は急いで立ち上がると鞄を抱えて伶に笑いかけた。
頭にはまだ先ほどの出来事が薄くこびり付いていたけれど、見ない振りをして自分を誤魔化した。

「う、うん。帰ろう」
「よっし、じゃあ先輩、お疲れ様でーす」
「おー、じゃあな戸沢（とざわ）」

大道具を漁りながらぶっきらぼうに手首ごと手を振って返事をした先輩に背を向けて、伶と智奈は二人並んで教室を後にした。

淡い色の街灯が並ぶ商店街をのんびりと歩きながら、伶は軽やかな声で智奈に話し掛けていた。
演劇部からしてみれば文化祭は校内で公演できる唯一であり最大の機会で、その劇での主役を務めることになっている伶の気分が高

揚するのは演劇部でない智奈にも分かり切っている。
分かり切っていることだし、尊敬すら抱いている伶が主役を努めると聞いた智奈も同じように嬉しいのだ。
故に二人は同じ話を何回も何回も、しかしとても楽しそうに繰り返していた。

「……でね、二階から飛び降りるってシーンの為だけに先生が陸上部からマット借りてきちゃってさ」
「それで野々宮先生と高木先生が大喧嘩したんだっけ？」
「うん、そーなの。あれ？前にも話した？」
「その後も子供みたいな喧嘩してるとか色々聞いたよ」
「あー…ごめんね、何回も言っちゃってさ」
「ううんっ、聞いてて面白いから大丈夫だよ」

頬をかきながら苦笑した伶に智奈は楽しそうに笑顔を返して、「それで？」と話の先を促す。
促された伶にはまだまだ話したいことがあるのかごめんね、と一度謝ってから再び話を始めた。

「喧嘩してる時は皆して『台本書き直そう』とか『マットの代わりにクッションにしよう』とか言ってたんだけどさ、あたしとしてはやっぱり格好良いものを見せたいのよ」
「戦うお姫様だもんね」
「そう！初めて主役やるってこともあるけど、戦うお姫様だからさ、格好良いほうがいいじゃない？だからあたしつい「マット無しでもやります！」って言っちゃってさあ」

思い出してしまったのか伶は恥ずかしそうにはにかんで、智奈もそれに釣られるように笑みを浮かべた。
街灯に照らされて見える彼女の頬はやはり気分と共に高揚してい

るのかほんのりと赤い。
ほとんど幽霊部員のような状態の智奈にとって部活に真剣に打ち込む伶の姿は本当に格好良く見えていた。

「そしたらタカブーもなんか知らないけど「戸沢の男気に負けた」だとか何とか言っちゃって、てかあたし男気とかいらないし！」
「ふふっ、でも伶ちゃんカッコいいし、クラスの男子よりも強いと思うよ」
「ちょっと、智奈までそんなこと言うのー！？」

伶が上げた大声に、シャッターを閉めていた店の主人が身体を強張らせてから小さく苦笑した。
安全に登下校できるようにほぼ毎日通っているこの商店街でも、伶が文化祭の劇の主役をやることになったのは随分と知れ渡っていて、同時にここ最近の伶のテンションの高さも伝わっているのだ。
腰を屈めれば入れるほどの高さになったシャッターの前に立って、店の主人が声を張り上げる。

「よお、伶ちゃん！応援してるからなっ！」
「うおっ、おっちゃん！ありがと、頑張りまーすっ」

笑顔でピースした伶に店主がガッツポーズを返した。目が合った智奈がぎこちなく会釈すると、同じように笑顔とガッツポーズが返ってきて、ひとまず安心する。

「智奈ちゃんも応援してやれよっ、伶ちゃんはなんだかんだで甘えっ子だかんなあ！一人じゃ寂しいだろっ」
「うるさーいっ！おばちゃんに黙ってお酒飲んでたことバラすぞっ！」
「馬鹿っ、それはシーッだ！」

人差し指を立てて唇に当てた店主に、伶は笑いながら手を振って、振り返されたのを見てから隣の智奈に照れくさそうに笑いかける。背負った鞄が胸中を表すかのように揺れた。

「まっ、おっちゃんの言ってたことは抜きにしても、やっぱり智奈の応援が一番効くからね！よろしく頼むよっ」

「え、あっ、うん！が、頑張りますっ」

力んで返事をした智奈をしばらく見つめた伶が噴き出して、声を上げて笑い始めた伶に智奈が目を白黒させながら焦る。

ひとしきり笑い終えた伶は、荒くなった息を整えると目尻の涙を拭いながら明るく笑った。

「よっし、頼んだよ親友！」

「っ、うん！」

まるで姉妹のように仲良く歩く二人を、淡く優しい色の街灯が柔らかく照らしていた。

思えば、あの時が一番幸せな時期でした。

可愛くて明るくて、いつも私を引っ張って行ってくれた大切な親友。

あんなことになるなんて、想像したことすらありませんでした。

忙しない足音が響いていた。

文化祭まで後一週間。確実に日の出る時間も短くなっていて、呼吸もままならない状態で走る智奈の姿を照らすものは教室から漏れ出る灯りのみだった。

心臓の音がやけに五月蝿い。息苦しさからかそれともまったく別の理由からか滲み出てくる涙が視界の邪魔をした。

歩く生徒を半ば押し退ける様に走る。階段を駆け下りて、曲がり角に足を取られつつも精一杯走る。

目的地である体育館が見えると、智奈の鼓動は一層酷くなった。

閉まっている扉に手をついて、乱れる呼吸を何とかしようと息を吐く。下を向くと、目に溜まっていた涙が頬を伝った。

――――伶が、飛び降りるシーンで怪我をした、と聞いたのはつい先ほどのことだ。

わざわざ伝えに来てくれた教師は手短にそれを伝えて、その後すぐに救急車を呼びに行った。

救急車を呼ぶ。　その言葉の意味が分からないほど幼いわけでもない。けれど、心のどこかでは軽症だろうとも思っていた。不安で涙が滲んでもまだ、そんなに酷くはならないだろうと。

意を決した智奈は呼吸が整うとの同時に制服の裾で滲む涙を拭って、震える手で躊躇いがちに扉を開いた。

橙色に近い色の灯りに照らされた体育館のステージの上に、大勢の人だかりが出来ている。
恐らく中心にいるのは怪我をして倒れた伶で、傍にいるのは顧問の野々宮と養護教諭の虎見だろう。
ざわつく人々に嫌な想像ばかりが頭に流れて再び泣きそうになってしまった智奈は、大きな深呼吸を一つすると上履きのまま一気に駆け出した。

「伶ちゃん――――――！」

人だかりの外で伶が倒れているであろう場所を見ていた女子生徒が叫ぶようなその声に反応して振り返ってから、智奈を見とめて息を呑む。
現場を見たせいか随分と青ざめてもはや白いといっても良い顔色をしたその少女を見て、智奈は輪に入る一歩手前で弾かれたように足を止めた。
きゅ、と上履きと床が擦れあってか細い悲鳴を上げる。
再び始まった動悸を押さえつけるように短い息を吐いた智奈は、掠れた声で女子生徒に問い掛けた。

「……れ、伶ちゃんは……？」
「……見た目は、気を失ってるような感じだけど…」

目を逸らして言いよどむ少女に、智奈の顔から徐々に血の気が失せていく。
ざわついている輪の中心からは「担架を、」と叫ぶ声や伶を呼ぶ声が響いてくるがそれすらもどこか遠くの世界の声のようであった。
目線も意識も真っ直ぐに、目の前の少女だけに注がれている。

どくどくと鈍く響きつづける鼓動の音と、高く細い耳鳴りの音が重なって、智奈は背中に嫌な汗を感じ始めていた。
言おうか言うまいか躊躇って目を泳がしていた少女は、確かめるように一度人だかりの中心を見やって、それから、智奈にだけ聞こえる声量で呟いた。

「……骨折、してるかもって」
「え……？」

骨折。

その二文字が何を意味するか、なんて聞かなくても当然のように分かってしまった。
頭に浮かんでくるのは、主演が決まったことを話してくれた時の伶の笑顔だとか、一緒に台本を読んで遊んだりしたことだとか、迫真の演技を見せてくれた時の真剣な表情だとか――――、

『ねえ智奈！あたし初めて主役やれるんだよ！すっごい嬉しい！』

『お姫様って言ったら智奈っぽいけどさ、今回のは戦うお姫様なのよ！これならあたしにぴったりだよね！』

『わたくしの名を誰と心得る！かのトラユメーヌ王の一人娘、メラ

ティスなるぞ！――――なんちってね、あはっ』

――――あんなに、輝いていたのに。

前髪の間に微かに見える薄緑の瞳から、透明な雫が溢れ出た。

呆然とした表情で、力無く立って、智奈は泣いていた。

あんなにも練習して、台本がボロボロになるまで読み込んで、素人の智奈にまで意見を求めて、あんなに、あんなにも真剣に取り組んでいた伶が、劇に出られなくなってしまうなんて、そんなこと、あっていいものか。あっていいはずがない。

代われるものなら私が代わりたい。役立たずで、いつも伶ちゃんに頼ってばかりの私が。そう思うのだけれど、この世界は哀しいまでに理不尽だった。

瞬きすら忘れて、声もなく泣き続ける智奈の後ろを、白い担架と足音が駆けていく。

人だかりを掻き分けて輪の中心まで入り込んだ教師は、生徒達に道を空ける様に手で示しながら叫ぶように養護教諭たちに声をかけた。

「野々宮先生！救急車呼びました！」

「ああ分かった！　戸沢！大丈夫か戸沢ッ！」

ぐったりとした状態で担架に乗せられた伶は呼びかけられても目を閉じたままぴくりとも動かなかった。
戸沢、と呼びかける声に反応したのは智奈の方で、担架を通すためにぽっかりと空いた人の穴へと泣きながら顔を向けて、頼りない足取りで伶のいる方へと歩を進めていた。

見えたのは、唇まで真っ青になって、落ちた時に打ったのか額から血を流す伶の顔だった。

床には妙に現実味のない赤色をした液体が垂れていて、智奈は最初、それが血であることに気付けなかった。
担架に乗せられる時に見えた足は所々皮膚の色をしておらず、智奈は歪んだ視界のままだがそれを確認してしまって、気の抜けたようにその場に膝をついた。
心配した女子生徒が声をかけてくれるが、まったく意味を持たない音にしか聞こえない。

「野々宮先生は部員をお願いします！後で病院名を連絡しますので！」
「はいっ！」

慌しい足音を立てて、数人の救命士と担架を運んでいった養護教諭を見送った野々宮は、難しい顔で息を吐いてからこちらを見ている智奈に気付いて目を見開いた。
女子生徒の声にも反応しないところを見て、床に座り込んでしまった智奈の前まで走り寄ってくる。
呼びかける女子生徒の声にも呆然としたままの智奈に、野々宮は同じ目の高さになるように膝をついて、彼女の両肩を掴んで軽く揺すった。

「グノーシス？おい、平気か？」
「……あ……、せんせ、……れ、伶ちゃんが、……伶ちゃん、が、っ……」

たどたどしく言葉を紡ぐ智奈を覗き込むようにして顔を見合わせた野々宮だったが、前髪越しの瞳はまるで焦点が定まっていなかった。
ただ子供のように「伶ちゃんが、」と繰り返す智奈に一瞬息を呑んで、それから唇をかみ締める。
智奈がハーフ故に友人を持つことに消極的だったことも、親友が伶一人だったことも、野々宮は知っていた。知って、分かっていたから、智奈が耐え切れないショックを受けるのも無理のないことだと考え、とりあえず状況の把握と気持ちの整理が必要だと判断した。
気合を入れるように息を吐いた野々宮は、力が入っていない智奈の身体を抱きかかえるように支えて立たせると、傍に立っている女子生徒へ指示を出した。

「今日はもう帰っていい。俺はグノーシスを送った後に戸沢の様子を見てくるから」
「……はい」
「よし。それじゃ俺は、」
「あ、あのっ」
「ん？」

智奈を支えたまま身体の向きを変えていた野々宮は顔だけこちらに向けて振り返った。
まだざわついている皆の前で立ち止まらせてしまうのがあまり良くないと分かっている女子生徒は、手短に終わらせようと思いつつも躊躇うように間を空けてから、口を開く。

「……主役、誰になるんですか？代わりなんて部員に出来ません、よね」
「それは……」

本当に心配そうに、それでもこれだけは確かめておかねばならないと言うように聞いてくる女子生徒に、野々宮が言葉を濁す。
部員としては伶という中学生屈指の演技力を持つ役者が怪我を負ったこと、そして素晴らしい役者を失ったまま劇をすること、どちらも同じように不安なのだろう。
その気持ちを汲み取った野々宮は、短いが深いため息を零した後にゆっくりと言った。

「後で考えよう。今軽々しく言えるようなことじゃないしな」
「……分かりました。でも、代わりが見つからなかったときは、」

言葉を切った少女が両手を重ねてきつく握り締める。

「……劇を中止して欲しいです」

覚悟の色を宿した瞳を見つめ返して、それが本物だと悟った野々宮は小さく、しかししっかりと頷いた。
それを見た少女が、一先ず安心したというように息を吐く。
野々宮は自分でも納得するように何度か小さく頷いてから、少女へ視線を向けた。

「分かった、それは皆にも聞いておいてくれ。…じゃあな」
「はい」

はっきりとした返事を聞いて、智奈を支えながら歩き出した野々

宮だったが、依然、智奈の薄緑の瞳は焦点が合うことも無く、また光を映すことも無かった。

消毒液の臭いが鼻につく。
ゆっくりと目を開けると、そこは清潔感に溢れた、けれどどこか冷たい印象のする白で埋め尽くされていた。どうやら自分はベッドに寝ているらしい。でもどうして？

ぼんやりした頭のままでここがどこで、自分がどうしてここにいるのか考えていた伶は、視線を天井から寝ているベッドへと下ろした瞬間はっとして短く息を吸った。

「ち、…な……？」

規則的で、ゆっくりとした柔らかい吐息が聞こえてくる。

ベッドの端に遠慮がちに伏せている親友の姿を見とめた伶は、その後すぐに視界に入った自分の足を吊る布と、それと同様の色に包まれた足の存在に気づいた。

途端、注ぎ込まれるような感覚で記憶が戻ってくる。

「……そ、…だ……あたし、……」

落ちたんだった。

そう呟いた声は色々な感情に押しつぶされて言葉にならなかった。

絶望とも悲しみとも落胆ともつかない入り混じっていて判別できない感情に、伶は叫びだしたい衝動に駆られたが、脇で眠る智奈が視界に入るとすぐさま唇を噛み締めた。

信じたくない事実に体が震えるが、それでも涙を堪えるために数秒間息を止めて、平常心を装いつつ智奈を呼びかける。

「…智奈、智奈、起きて」

「……んう……？」

呼ばれて顔を上げた智奈は、寝ぼけ眼をゆっくりと擦ってから何度か瞬きして、それから目を見開いた。

声にならない声が、喉から零れ出る。ぽかんと開かれた口と、細かく繰り返される瞬きが驚きを如実に表していて、こんな状況だというのに伶はつい声に出して笑ってしまった。

笑われた智奈は困ったように首を傾げたが、伶が笑っているという事実に安心して少し経てば同じように口元に笑みを浮かべていた。

そしてほっとしたように息を吐いて、ベッドに手をついて丸椅子から立ち上がる。

「ちょっと待ってて、伶ちゃんの目が覚めたら教えてくれって言われてるから、」

お医者様に言ってくるよ、と優しい笑みを浮かべて言ってくる智奈の顔をしばらく見つめてから、伶はそっと目を伏せてベッドに体重をかけている小さな手を握り締めた。

ガーゼが当てられているその手が自分の手に重なっているのを見た智奈が、伶へと顔を向ける。

「伶ちゃん？」

「……あのさ、」

「うん？」

首を傾げた智奈に、俯いたままの伶はしばらく黙り込んで、何度か静かに深呼吸を繰り返すとぱっと顔を上げて手を離した。

その顔には、いつも通りの明るい笑顔が乗っている。

「やっぱなんでもないやっ、行ってきなよ」

「……そう？」

「そうそう、まあ、あえて言うならお腹空いちゃった、とかかな？」

笑いながら軽やかに冗談を言い放つ伶をしばらく不思議そうに見つめていた智奈だったが、特に変わった様子も見られなかったので気のせいだと思うことにした。

後で改めて思ってみれば、起きてからすぐに伶が演劇がどうなったのか聞かなかったということがどれだけの異常事態か分かったのに、その時の智奈には「伶が目覚めた」という事実に対する安堵感

しかなかったのだ。

医師に連絡が渡ってから数分後に現れた野々宮に智奈はそっと頭を下げて、病室から出て行った。
やはり演劇部のことであるし、二人だけにしたほうが良いと判断したのだ。

「じゃあ私は、ラウンジで時間を潰してます」
「ああ。終わったら呼ぶよ」
「はい」

伶のベッドの隣に腰掛けた野々宮は、見舞いの言葉から始め、伶が眠っていた二日間のことを話し、そして充分に心の準備をさせてから、『演劇を中止する』という決定を伶に告げた。

覚悟はしていたのだろう。それを聞いた伶は心から辛そうな顔をしたものの、泣くことも叫ぶこともせず、ただ一言謝って野々宮に頭を下げた。
それを見た野々宮も辛そうな顔をして、伶に顔を上げるように言うが、彼女は依然頭を下げたままだった。

「……すみません、私の不注意でこんなことになってしまって」
「いいんだよ、お前の熱意は皆分かってるから。だから今回の劇だってお前がいないならやらないって皆が言ったんだ」

「……でも、……あんなに頑張ってたのに、あたしがそれを潰しました」

そう言ってシーツをきつく握り締める姿に、野々宮が唇を噛んでそっと息を吐く。

出来ることならば部員たちにも劇を発表させてやりたいし、伶も主役として出してやりたい。けれどそれには三ヶ月もの時間が必要で、残り五日という今の状況でそれを叶えるのは不可能だった。

代役を立てるにも、一人一役という状態で進めてきた部員に主役であるメラティスの台詞を覚えろなんて酷なことも言えない。

二階からのシーンはどうとでも変えられるかもしれないが、劇を上演するという願いを叶えるに伶が歩けるようになるか、もしくはメラティスの台詞を完璧に覚えている人間が必要だった。

無理だと分かりきっていても未だ希望を捨てきれずに何かにすがろうとしている自分に気づいた野々宮は、口元に苦々しい自嘲の笑みを浮かべた。

「もしも、今メラティスの台詞を覚えている人間がいるってなら、立ち回りぐらいは五日でどうにかなりそうなもんだけどな……」

無理に決まってる、と笑みを崩さないまま伶へと笑いかけた野々宮だったが、彼の目に映った伶の顔は何かに気づいたように微かに希望の色を宿していた。

それを見とめた野々宮が訝しげに、目で伶へ問いかける。

呆然としたままの伶の顔に浮かぶ想起の色が濃くなっていき、それと同時に躊躇うような瞬きが増えていった。

目を逸らしたまま、自分を落ち着かせるように瞬きを繰り返した伶が不意に息を止めて、それから深く深呼吸する。

「……います」

「……なんだと？」

本当に？と声に出せず目で問いかけてくる野々宮の前で唇を噛み締めた伶は、やがてゆっくりと言葉を吐いた。

それは彼女にとって最も取りたくない手段だったが、同時に一番安心出来る手立てでもあった。

頭に浮かぶのは、決して人前に出たがらない、目立つことを極端に嫌う少女。

「……智奈なら、あたしの台詞を全部覚えてます」

彼女は信頼と確信を持って言葉を紡いだ。それが後に悲劇を呼ぶとも知らずに。

続く。

夏だ！アレだ！会計だ！　5（後書き）

さあ雲行きが怪しくなって参りました↑
１万文字超えたんで一度ここで上げます。

幽霊ちゃんの名前は智奈・グノーシスですよ。フルネーム出てなかったんで一応（笑

夏だ！アレだ！会計だ！　6

次の日の放課後に野々宮に呼び出された智奈が、その口から紡がれた言葉に対してしたことは、はっきりとした拒絶だった。

まるで智奈のほうが病人なのではないかと思ってしまうほど真っ青になって、俯き加減に首を振る。

安い蛍光灯の明かりの下では更に白く映る顔色に野々宮が気遣うように腰を屈めるが、智奈はぎゅう、と両手を握り締めたまま目を合わせることすら拒否した。

赤い髪が、智奈の心情とは裏腹に緩やかに揺れて、擦れる音に混じって震えた声が響く。

「…出来ません」

「……分かってる。でも、戸沢が言ったんだ。お前なら出来るって」

「……」

伶の名前が出た瞬間、前髪から透けて見える緑の瞳が動揺を示して微かに揺れたが、それでも智奈は再度首を振った。

頑ななその態度に、諦めと落胆を半分ずつ混ぜた溜め息と共に野々宮が肩を落とす。野々宮が黙ってしまったことで生まれた沈黙が静かに資料室を埋めていくのを感じながら、彼は天井を見上げる。

確かに、分かりきっていることだった。
ただでさえ目立つことに異常な恐怖心を抱いている智奈が、人気者である伶の代わりに舞台に立つなど望むはずがない。それどころか共に部活へ来てもらうことさえ出来ないだろう。
それだけ、智奈の心に刻まれた傷は大きく、明るく優しい伶でも癒しきれないものなのだ。
無機質な蛍光灯の光から窓の外の柔らかい夕日へ目を向けた野々宮は、ゆっくりと、決心をつけるように息を吐いて、智奈に笑顔を向けた。

「…確かに、無理強いは良くないしな。残念だけど、しょうがない」
「……すみません」

本当に申し訳なさそうな謝罪の声に、野々宮は苦笑して智奈の肩に軽く手を乗せる。ぽん、と乗せられた手に反応して顔を上げた智奈の顔は今にも泣きそうで、その顔は野々宮の苦笑を更に誘った。
野々宮自身、教師生活をしてきて久しぶりに出会った、いや、出会うことが出来た伶という素晴らしい役者を主役に、例え中学生の拙いものだとしても精一杯の、全力の劇をやりたいと、強く願っている。
けれどもそれは野々宮だけが願ったのでは叶う願いではない。伶がいて、それを支える周りの役者がいて、そして伶が怪我をして降板した今では、伶が指名した智奈がいなくては、叶うことがない願いだ。
その智奈が拒否するのであれば、野々宮は諦めるしかない。

「いいって。お前にだってやりたいこととやりたくないことがあるだろ？やりたいことを一生懸命やってくれれば、それでいいんだよ」
「……先、生」
「…泣くなよ。俺も釣られて泣くかもしれないだろ」

冗談混じりに、笑って言った野々宮を見上げた智奈は、下唇をぐっと噛んで頭を下げた。
謝罪の意を込めたそれを終えると、智奈は逃げるようにして資料室から出て行ってしまった。ぱたぱたと、智奈が軽いのか床と上履きのせいなのか、やけに質量を伴わない音で響く足音を聞きながら、野々宮はがしがしと頭をかく。
脳裏に浮かぶのは、伶の変わりに智奈を出させたいと言った時の部員達の反応だった。

演劇部員は元々智奈に対して悪意などを持っていない。それは確実に、自信を持って言える。
明るく優しい伶が、唯一智奈にだけは、気を張らない甘えるような笑みを向ける。その智奈が、悪い人間でないと分かっているのだ。表情を作ることに長けている人間は、本心から出る表情を読み取ることにも長けているから、部員のほとんどは伶が智奈に心を許していることは分かっていた。
しかし、それとこれとは別の話である。
一年の頃から他とは比較できないほどの実力を持っていた伶が二年になった今現在、彼女の代わりが出来る人間など演劇部内でもいない。
それを、伶が指名したとは言え台詞を覚えているという理由だけで智奈に代わりをさせるというのは納得できないことだった。
演技力以前の問題だし、正直言って智奈に舞台に立つことは不可能だろうというのが皆の意見である。
野々宮もそのことは重々承知していたのだが、怪我をした伶も劇の中止なんて望んでいなかったし、もしも智奈が断らなかったら、という仮定の話だから、もし智奈が受け入れてくれたら劇を上演して欲しい、と、そう頼んだのだ。

頭まで下げた野々宮の言葉に、演劇部員は渋々了承してくれたのだが、結局智奈は受け入れてくれなかったため、この話は無しになる。

はあ、と重いのか軽いのか自分でも分からない溜め息を零して、野々宮は資料の入った棚にそっと背を預けた。

廊下の壁に立てかけるようにして置いておいた鞄を引っつかんで、教科書で重いそれを胸に抱えながら走る。

何かに追い立てられるがのごとく走る智奈の心に浮かんでいるのは、疑問ばかりだった。

何故伶は自分を代役なんて物に指名したのだろう。ただ、一緒にいて、練習を見て、台詞を覚えているというだけで。

何故、こんな自分に期待を向けるのだろう。いつも伶の影に隠れているだけの自分に。

何故、どうして、なんで。

ぐるぐると智奈の中で回る疑問は彼女の足を否応にも急かし、彼女の心を信じられないほど焦らせた。
階段を駆け下りて、もつれる足で昇降口へ走る。もう季節は秋だというのに、じっとりと嫌な汗が背中を伝っていた。
自分のクラスの札がかかった下駄箱へ駆け寄って、鞄を半ば落とすように置いた智奈は、そこでようやく、靴を取りだそうとする自分の手が震えていることに気付く。

「あ……っ、……」

蘇るのは、呼び起こしたくもない記憶の底の悪夢。
嘲る声。冷たい視線。嘲笑。自分の一挙一動が彼らにとってはどうしようもなく面白く、そして残酷な娯楽へと変わる。
目立ちたいわけではない。同情されたかったわけでもない。ただ、こんなことをされるくらいならば自分など最初からいないように扱ってもらった方がまだマシだった。
いないように振舞うことも許されなかったあの何年かは智奈にとって地獄で、それは中学に入って伶が智奈を救ってくれてからも心の奥で続いている。
これは多分一生消えることはなくて、自分はこの恐怖と痛みと共に生きていくのだろうと、智奈は思っていた。
しかしこの痛みは思い出である限りこれ以上強くなることはない。波風を立てずに、人畜無害な風を装っていれば、目立つようなことをしなければ、これ以上痛みを酷くすることはない。
ぎゅ、とセーラー服の胸元を握り締めた智奈は、走ったことに寄る生理的な動悸と、恐怖からも来るそれを押さえつけるように呼吸を繰り返した。

大丈夫、私は断ったから。目立たないで、これまで通り、過ごしていける。

一番に思うことが自分の保身である、という事実に智奈は微かに眉を顰めた。同時に、これが自分を助けてくれた親友に対する態度なのか、と別の自分が心を刺してくる。
自分が断ったと知れば伶はきっと悲しむだろうし、少なからず残念に思うだろう。
あの、智奈を気遣う時に浮かべる伶の笑みを頭に思い描いた智奈は、自分に彼女を喜ばせることが出来ないという不甲斐なさに、静かに涙した。
自分がもっと快活で、はっきり物を言える少女であったなら、また、そうなれたなら、伶に恩返しが出来るかもしれないのに。
けれど自分が伶に恩返しできないのは自分が快活な少女になろうとしなかったからだと分かっている智奈は、泣くことしか出来なかった。
自分自身を磨く努力もせずに、伶の添え物で満足している自分には、彼女を喜ばせることすら出来ない。いつも助けてもらっているのに、伶を助けることが出来ない。
誰もいない昇降口で、嗚咽を零して蹲る智奈の耳に、先ほど聞いた野々宮の言葉が蘇る。

――――お前にだってやりたいこととやりたくないことがあるだろ？やりたいことを一生懸命やってくれれば、それでいいんだよ。

自分を労わってくれた野々宮の言葉。先ほどまでは混乱していて意味を言葉の形すら把握し切れなかったそれは、柔らかく、そしてゆっくりと智奈の頭に入って来た。
額を膝に押し付けた格好のまま、智奈はぼんやりとした目で、無意識に呟く。

「…やりたいことって、何だろう」

呟いた瞬間、智奈ははっとして身体を強ばらせた。力の抜けた足は智奈の身体を支えきれずに、彼女はその場に尻餅をつく。
見開いた目に飛び込んできたのは、丁度下から二段目の位置に入っている上履きの背に書かれた、『戸沢』の文字だった。
丸い、女の子らしいその字を眺めながら、智奈は勝手に紡がれる自分の言葉を聞く。

「……私は、……やりたい、こと…してるの……？」

何をすることからも逃げて、目立たないことだけに必死になって、伶以外に友人も作ろうとしなかった。
いつも笑っていた伶だって、少しくらいは迷惑に思っていたかもしれないのに、何もせずに彼女に寄りかかっていた。
やりたくないことばかり上げて、やりたいことなんて、思い浮かべようとすらしなかった。

「……やりたいことって、何……？」

気の抜けたような息を吐いてよろめきながら立ち上がった智奈は、下駄箱を支えにするようにして靴を取り出す。
事務的に上履きを脱いで、靴のあった場所と入れ替えるようにして置いて、力の入らない手に任せるようにして靴を落とした。
ころん、と横に倒れた靴を眺めながら自分はなんて薄っぺらい人間なんだろうと思って、智奈は再び泣いた。

壁もシーツも匂いも真っ白な病室のベッドの上で、伶は智奈が思い浮かべたとおりの笑みをその顔に乗せた。
頭より高い位置に置かねばならないらしい足は緩く吊られていて、智奈はそれに気を取られたふりをして辛そうな伶の笑みから目を逸らす。
野々宮の口から伝わるよりは良いかもしれないと、話を断った翌日すぐに伶の病室へと来たのだが、もしかしたらそれは間違いだったのかもと思った。
辛そうな伶を直接見るくらいならば、野々宮に言ってもらって、後で謝った方が良かったかもしれない、と。
気持ちが沈みこんでいくのを感じて俯く智奈に、伶が苦笑しながら言う。

「…まー…そうだよね、演劇なんて初めてやる人からしたら怖いもんね」
「……ごめん」
「いいよ、私が勝手に言っちゃっただけだし」

大丈夫大丈夫、と笑うその顔にはやはりまだ悔しさのようなものが残っていたけれど、智奈はそんな伶の顔を見ても人前に立つ気が起きない自分に半ば嫌悪するように落ち込んだ。
膝の上に乗せた手をきつく握り締めて、息苦しさを誤魔化すように細く呼吸する。
伶は自分を責めるようなことはしないだろうと思っていた。どれだけ悔しくても、他の部員に申し訳なくても、いつもいつも智奈が助けてもらってばかりなのに、それでも責めたりはしないだろうと。
これまでの智奈が知っているのは中途半端な優しさを押し付けてきて、それで恩着せがましく見返りを要求するような人間ばかりだったから、伶の優しさはとても暖かくて、そして貰っていて申し訳なくなる。
自分は彼女の優しさに甘えているだけだ。何も出来ないししようともしないくせに、伶の陰に隠れて生きている。
目の奥からじんわりと込み上げてきたそれは瞬く間に昨日のように頬を伝った。ベッドの上に座ったままの伶が目を丸くし一瞬呆然としたが、すぐに智奈の頬を両手で包み込んで引き寄せる。
「泣かないで。智奈のせいじゃないんだよ、気にしなくていいんだよ」
優しく、どこまでも優しく言って笑う伶の目は柔らかく、そして明るくて、それを前髪越しに見つめ返しながら智奈は伶の手のひらを押しのける様に首を振る。
動きに沿って、透明な雫がぽたぽたと落ちる音を聞きながら、智奈は頬を包む手の上に自分の手を重ねた。
違うんだよ、伶ちゃん。

言いたい言葉は、喉の奥に張り付いて嗚咽に変わる。
泣き続ける智奈の頬を伝う涙が、伶の手と智奈自身の手を濡らして、尚も落ちていく。伶は口元に笑みを浮かべると、いつもと変わらない明るい声音で言う。
「智奈は優しいね。気にしなくていいのに、大丈夫だって、ね？」
本当に、心からそう思っている声に、智奈の両肩がびくりと跳ねた。
顔を上げれば、その声と同じ色の笑顔があるんだろう。そう考えるだけで智奈の胸に鈍い痛みが広がった。
違う、違うんだよ。私はそんな、綺麗な理由で泣いてるんじゃないんだ。
言いたいのに、怖くて言い出せない言葉を嗚咽を代わりにして零す。聞いてほしいわけではない。むしろ聞かれたくはない。
もしも伶の代わりに劇に出たくない理由を言ってしまったら、きっと彼女は幻滅するだろう。顔には笑みを浮かべて、慰めてくれるだろうけど、恐らく幻滅する。
伶は智奈のことを友達だと思っているのに、智奈は伶が苦しんでいる時に友情よりも保身を取ったのだ。幻滅されずに済んだとしても、軽蔑されるに違いない。
ただでさえ友人なんていないのに、伶にまで離れられたら、自分はどうすればいいのだろう。
そう思った瞬間、思わず智奈は口元に笑みを浮かべてしまった。
なんてことだ。自分はこんな時にまで自分の身の安全のことしか考えていないのだった。最低だ。
歪んだ笑みを伶に見られる前に奥へ押し込めて、智奈は泣きながら顔を上げた。

「……私が代わりに怪我したら良かったのに」

嗚咽交じりの、ところどころ引きつった声は、目の前の伶に届くまでに随分と時間がかかったようで、ベッドに座ったままの伶はしばらく呆けたような顔をしていた。

見ていられなくて目を伏せた智奈の睫毛から雫が落ちる。熱い雫がその手を滑る前に、伶の手は智奈の頬から力を無くしたように落ちていた。

ぱふ、と場に似合わない軽い音を立てて落ちた手を、智奈の目が追う。

「……冗談でも、そんなこと、言わないで」

その手が震えていることに気づいたのと、伶の唇から零れた声が響くのは、ほぼ同時だった。

弾かれたように顔を上げた智奈に、伶が今にも泣きそうな顔をして言う。

「もし、もしだよ？　あの時に智奈とあたしが入れ替われたとしても、あたしは、そんなの全然嬉しくない。…智奈に、あんな痛い思いさせたくない。智奈が死んじゃうかもしれない、なんて、思いたくない。あたしが、落ちて怪我したとき、それ、見たとき、怖かったでしょ？死んじゃうんじゃないかって、怖くなったでしょ？」

智奈が、伶の言葉の意味を噛み砕いて、理解して、頷く。

「……そんな怖い思いして、智奈が死んじゃうかもしれないって時に、演技なんて出来ない。したくない。だから、あたしは、っ、智奈があたしの代わりに怪我しても全然嬉しくなんてない！」

普段は気丈な、何があっても明るい伶が、最後の言葉を言い切ると同時にその瞳から涙を零した。
驚きに固まる智奈の前で、蹲ることも顔を覆うことも出来ない伶が、ぼろぼろと涙を零して、叫ぶように言う。

「そりゃっ、死ぬほど、劇やりたいけど、そんなのっ、…っ、…だって、…応援してくれるって、言ったじゃん…ッ」
「れい、ちゃん…？」
「あたし、智奈のために、せんせ、に頼んで、っ、席用意したんだ、…っ、一番近い、一番よく見える席…っ！」

智奈に、一番近くで応援してもらいたかったから。
なのに智奈がそこにいないであたしだけ演劇なんてしたくない。

掠れる声で泣きながら叫ぶ伶に、一度止まりかけていた涙が再び智奈の頬を伝った。
しゃくり上げる伶の隣で、智奈も同じように声を上げて、泣く。
ひとつは、こんなにも自分のことを思ってくれていた親友に、感謝の気持ちで。
もうひとつは、こんなにも自分のことを思ってくれていた親友に、謝罪の気持ちを込めて。
何も考えずに、ただひたすらに、二人して泣いた。

夕日も沈みかけてきたころ、伶と智奈は、お互いに顔を見合わせて涙やらでぐちゃぐちゃになったそれに、同時に笑みを浮かべた。
乾ききらない、頬を伝う筋を残した笑みはまだ痛々しかったけれど、それでも今までで一番幸せな笑みだったと思う。

手の甲で頬を拭いながら、伶が恥ずかしいのか窓の外へ目を向ける。

「……あーあ…泣いちゃった」

「……うん」

「…泣かないって、決めてたのになあ」

「……うん」

「悔しいなあ、泣いちゃったよ」

悔しい、と言う割りに伶の顔はやけにすっきりとしていて、赤い光で照らされた横顔ははっとするほど綺麗だった。

今まで彼女は、どれだけの涙を我慢してきたのだろう。智奈に心配をかけまいと、野々宮や部員、親にまで心配をかけまいと、必死だったのかもしれない。

それでも今日、彼女は泣いた。智奈の前で、智奈を一番大事な親友だと示して、泣いた。

笑いながら、悔しい、と繰り返す彼女の横顔を眺めていた智奈は、不意に胸が痛くなって、手のひらでそこを押さえた。

辛いのが自分だけじゃない、なんて言葉、分かっていたはずなのに、全然理解していなかった。そう、辛いのは智奈だけじゃない。

伶だって、部員だって、野々宮だって、みんな、辛い。

なんで、こんな簡単なことが分からなかったんだろう。智奈が泣くように、苦しいと思うように、伶だって泣くし、苦しいと思う。

自分はどれだけのことが見えていなかったのか、今気づいた。もしも、今日伶が泣かなかったら、これからもきっと気づかなかっただろう。

そっと目を閉じた智奈は、一瞬だけ窓の外の夕日を思い浮かべて、まだ間に合うかもしれない、と呟いた。

かたん、と音を立てて立ち上がった智奈を、伶が見上げる。

「智奈？どうしたの？」
「……ごめん、ちょっと、行ってくるね」
「トイレ？」
「ううん。…行かなきゃいけないんだ。だから行ってくる」

分からないというように首を傾げた伶だったが、智奈の前髪越しの緑の瞳が綺麗に輝いているのを見ると、表情を緩めた。
笑みを浮かべて、「いってらっしゃい。また明日ね」と呟いた伶に、智奈も笑顔で「行ってきます」と返して、鞄を掴んで扉へ向かう。
自分の背を見つめる伶の視線を感じたまま、智奈は振り返らずに呼びかけた。

「伶ちゃん」
「ん？何、智奈」
「…ありがとう。あと、ごめんね」
「うん？」
「言いたかっただけだから。じゃあ、また明日」
「…また、明日」

伶の返事を聞くと同時に、智奈は駆け出す。
早く、出来るだけ早く着きたかった。彼はもしかしたら帰ってしまっているかもしれないし、校門自体が閉じているかもしれなかったから。
白いナース服の看護師に注意されるのも聞かずに、智奈はひたすらに走った。

ありがとう、ごめんね。

今から、がんばるから。

続く。

夏だ！アレだ！会計だ！　6（後書き）

若干短い気がしますが、このまま突っ走ります。

友人がうちの子描いてくれてひゃっほいだった。（もし描いて下さった方いらっしゃったら教えて…ください（二つの意味←

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6665h/

風鈴中学生徒会！

2010年10月10日02時42分発行